理論地理学ノート，No.24（2024），1～33

「ブラック=ブラン=ブゥール」の意義とその変化
－1998～2022 年のルモンド紙の記事をもとに－

滝　波　章　弘

Ⅰ　はじめに

現代のフランス語に「ブラック=ブラン=ブゥール Black-Blanc-Beur」という表現がある．字義的には，「黒人－白人－アラブ人」を意味する．「Black」が英語からの流用，「Blanc」が従来的な仏語，「Beur」が仏語「Arab」の逆さ言葉 verlan であり，頭文字が「B」で揃っている．

表現の起源は，1984 年にパリ南西郊イヴリンヌ県のサンカンタンにおいて，アルジェリア・カビリア系のジャン・ジェマドと白人系のクリスティンヌ・クダンが結成したヒップホップ系ダンスグループの名称“Black Blanc Beur”に遡る．グループ結成の意図は，郊外に新しい混交の記憶を作り，多民族のフランスで芸術を社会的なものにすることであり，当初応募者 600 人の若者から 39 人をオーディションで選んだが，後に数々のダンサーを輩出し，フランスや世界各地で公演してきた[1)]．

ところが，1998 年の W 杯フット[2)] で開催国フランスが初優勝すると，「ブラック=ブラン=ブゥール」は，「レ・ブルー」の愛称で知られるフランスチームの多民族な選手構成と，そのチームが象徴する多文化社会フランスの理想のスローガンを表わすようになった．したがって，「黒人系」に「混血」の人や，アジア・オセアニアの「褐色」の人も含まれるのか，「アラブ系」とされるのに，なぜ北アフリカのカビリア人やベルベル人が含まれるのか，といった疑問はあまり重要ではない．

現在のフランスの大きな問題の 1 つに，社会統合とアイデンティティの問題が挙げられる．フランスは欧州で最大規模の多文化社会だが，それが分断なく存在しているとは言いにくい．フランスは「白人社会」だとして，「ブラック=ブラン=ブゥール」を拒絶する人もいる．そのため，「ブラック=ブラン=ブゥール」のチームは頻繁に政治や社会に関連づけられ，議論の対象とされてきた．実際，極右勢力は，ジャン=マリ・ルペンとその娘マリンヌ・ルペンのようにフット嫌いが多く，多文化なチームに距離を置いてきた[3)]．逆に，黒人系やマグレブ系の若者は，ラップ音楽とともにフットを自分達の数少ない活躍の場とみなしてきた．

「ブラック=ブラン=ブゥール」が議論の対象になる理由には，このスローガンが社会や政治と関わるだけでなく，神話や幻想に過ぎなかった点がある．具体的に説明したい．1998 年の W 杯で優勝した「ブラック=ブラン=ブゥール」のフランスチームは，主義や立場の違いを超えて，大半の政治家から，多様な国民を融合するモデルや，台頭してきた極右政党に対する勝利として歓迎され，さらに移民系選手に依存してきたフランスフットの長い伝統や，移民系の親の出身国の文化とフランス共和国の文化を両立させるものとして評価された（Abdallah, 2000 ; Taïeb, 2001 ; Gastaut, 2008, pp.19-71 など）．しかし，21 世紀に入ると，フランスフットに関わる混乱が生じ，社会統合は進まず，極右台頭の不安も増した（Gastaut, 2008, pp.125-165 ; Geisser, 2013 ; Beaud, 2015 など）．その結果，多くの人々は「ブラック=ブラン=ブゥール」のスローガンに限界を感じるようになった．それでも，フランスの優勝は，ドイツのゲルハルト・シュレーダー首相にドイツ国籍の取得条件を変えさせる契機となり，多民族チームになったドイツは 2014 年の W 杯で見事に優勝するという効果も残した（Sonntag et Ranc, 2016, p.23）．

「ブラック=ブラン=ブゥール」については，称賛から幻滅への落差が大きいので，そればかりが指摘される傾向にある．しかし，筆者はより深く「ブラック=ブラン=ブゥール」を考察する必要があると考える．例えば「ブラック=ブラン=ブゥール」を神話や幻想と捉える場合でも，時期によって位置づけ方が変わるだろうし，話者によって解釈も異なるだろう．そこで，フランスの代表的新聞であるルモンド紙 *Le Monde* を取り上げ，その記事を分析する．同紙は，政治的にフィガロ紙 *Le Figaro* とリベラシオン紙 *Libération* の間に位置し，フランス社会の大勢を把握するには適している．また，署名入り記事が多く，ルモンド紙の記者や編集部だけでなく，専門家や知識人によっても執筆されているので，記事の意図や背景を把握しやすい．

分析対象は,「ブラック=ブラン=ブゥール」の語を1つ以上含む記事とする[4]．そして，このスローガンの意義や役割を明らかにするだけでなく，記事の主題にも踏み込む．実際，記事は1つのキーワードだけで成立しているわけではない．「ブラック=ブラン=ブゥール」の語を含む記事は，フット，政治状況，多文化社会，エスニシティ，アイデンティティなどを論じた記事でもあり，その内容を分析することは，これらの関係性を明らかにすることになる．したがって，本稿の関心は,「ブラック=ブラン=ブゥール」に限定されず，現代のフランスを取り巻く社会的な問題にもある．

Ⅱ　記事の時系列な変化

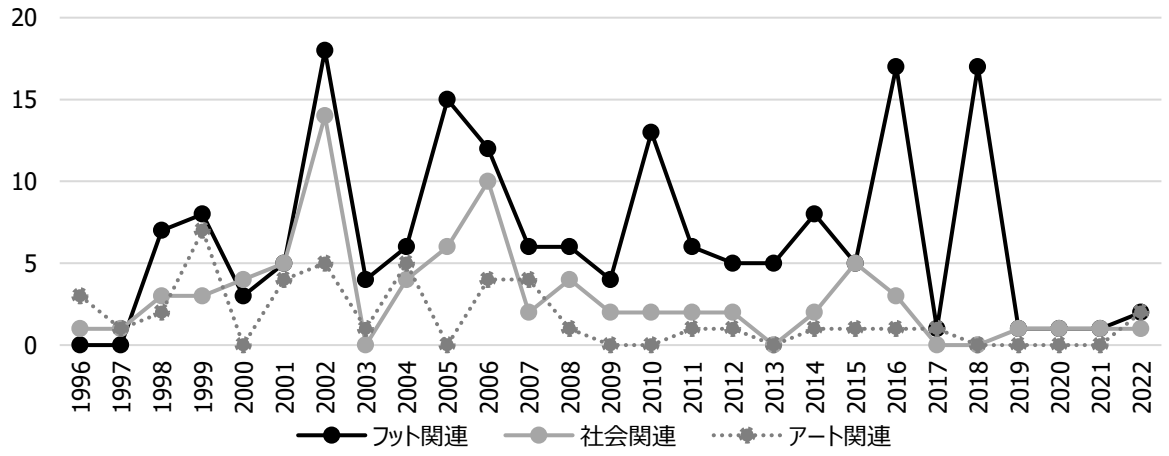
1. キーワードの頻度

ルモンド紙での「ブラック=ブラン=ブゥール」の初出は1985年で，1997年まではヒップホップ系ダンスグループをほぼ指し，記事数も少なかった[5]．ところが，1998年に「ブラック=ブラン=ブゥール」の語を含む記事が急に増えた．理由は，6月10日に開幕したW杯フットのフランス大会だった[6]．日付で見ると，4月10日にヒップホップの記事[7]，同14日に多文化社会の記事[8]があるだけだが，W杯でフランス優勝の可能性が出てきた7月9日以降は，フットに関する記事が集中して現れた[9]．そして，7月12日にフランスが優勝してW杯が閉幕すると，その後2週間足らずで「ブラック=ブラン=ブゥール」の語を伴うフットの記事はルモンド紙からいったん消えた．

「ブラック=ブラン=ブゥール」の語が出てくる記事を3つに分類したい．すなわち，ダンスグループを中心に，音楽や演劇の話題で出てくるアート関連の場合，フランスのフットチームを中心に，他のスポーツや他国のフットの話題で出てくるフット関連の場合，そしてフランスにおける多様な人々や文化の意味で出てくる社会関連の場合に分ける．社会関連の場合は，大半がフット由来の「ブラック=ブラン=ブゥール」と言っていい．

頻度変化を追うと，増減の波が分かる（第1図）．フット関連の記事は，2022年を除き，W杯開催年に増えている．他方，W杯がなくても，2005年や2016年は多いが，これも，後述するようにフットの動向が関わっている．また，出現時期をより細かく見ると，W杯開催中とその直後，最大でも閉幕後2週間までの時期に急増している．逆に言えば，こうした期間の前後1ケ月程度は，「ブラック=ブラン=ブゥール」を含むフット関連の記事がほとんどない．

社会関連の記事の増減は，フット関連の記事の増減に類似するが，これは両者が密接に関係していることによる．もっとも，フット関連での出現が非常に多かった2018年だけは，社会関連での出現が連動していない．つまり，2018年に至って，「ブラック=ブラン=ブゥール」を介したフットと社会の結び付きは小さくなったと思われる．アート関連での記事の増減は，全年次を通して，フット関連での記事の増減と連動しないが，これはフットチームの「ブラック=ブラン=ブゥール」とダンスグループの「ブラック=ブラン=ブゥール」に直接の繋がりが無いからに他ならない．



第1図　ルモンド紙での「ブラック=ブラン=ブゥール」を含む記事数の変化

記事数の年次別変化をグラフにした．年次によって記事総数が異なり，比率を計算することもできるが，傾向を大きく変えるほどではないので，頻度で示した．なお，検索結果をそのまま頻度とするのではなく，注5で述べるように，逐一確認した．

以上は，頻度から見た「ブラック=ブラン=ブゥール」の変化だが，以下は，ルモンド紙の紙版をもとに，フット関連の記事でもフランスに関わるものに限定し[10]，1998 年以降の 7 回の W 杯開催期間と閉幕後 2 週間（以後，単に「W 杯開催期間」や「W 杯中」と記す）を対象として，「ブラック=ブラン=ブゥール」の語が記事で果たす役割の変化を分析する．さらに，「ブラック=ブラン=ブゥール」のキーワードが最終的にどのような意義を有していたかを，社会や政治の動向を踏まえて明らかにする[11]．

2. キーワードの役割

新聞のキーワードを分析する際，その影響が 1 本の記事中のどの範囲に及ぶかに注意しなければいけない．最小ならば，影響が数語で作られるフレーズの範囲に留まる．この場合，キーワードは語として使われるだけの可能性が高い．中程度ならば，影響が数センテンスあるいは 1〜2 パラグラフ程度に達する．この場合，キーワードに対する評価や判断も記される．最も広ければ，キーワードが記事の主題に関係する．これは，キーワードが，文字どおり記事全体に渡るカギになっている．こうした区分によって，記事中での「ブラック=ブラン=ブゥール」の重要度が明らかになるだろう．

新聞が「ブラック=ブラン=ブゥール」の語を使う目的は，プラス面の指摘か，マイナス面の指摘かだけに限られない．例えば，「ブラック=ブラン=ブゥール」を歴史化させる方法がある．つまり，過去の出来事として位置づければ，評価は必須でなくなる．あるいは，「ブラック=ブラン=ブゥール」に大きな意味を持たせず，一種の決まり文句にすることもできる．この場合も，判断を回避できる．この他，単に疑問文に用いることもありえる．反語でも皮肉でもなく，「このチームはブラック=ブラン=ブゥールか？」と書けば，評価や判断を読者に委ね，新聞は立場を表明しないで済む．そこで，本稿では，「ブラック=ブラン=ブゥール」の語が肯定的に使われるか，懐疑的に使われるか，否定的に使われるか，評価留保のまま使われるかに分類する．

さらに，「ブラック=ブラン=ブゥール」の語に与えられる時間についても把握する．すなわち，この語が，過去の出来事に関連づけられるのか，現在の状況と結び付けられるのかを区別する．過去ならば，場合によっては，完全に歴史的な事象とされ，執筆時点の状況と切り離される可能性がある．

第 1 表は，記事中での「ブラック=ブラン=ブゥール」の役割の変化を示している．第 1 図に示した頻度の変化と同様に，2022 年の特異性が目立つ．つまり，2022 年を除けば，決勝に進んだ大会はメインテーマになる傾向が強い．したがって，一般的に W 杯でフランスが躍進した年は，「ブラック=ブラン=ブゥール」を含む記事数だけでなく，「ブラック=ブラン=ブゥール」の記事中での役割も重くなる．

第 1 表　記事での「ブラック=ブラン=ブゥール」の役割

開催年	結果	記事数	メインテーマ	パラグラフレベル	フレーズレベル	称賛の対象	幻想と判断	明確に否定	評価の留保	現在の論点	過去の事象
1998	優勝	7	2	3	2	6		1		7	
2002	ｸﾞﾙｰﾌﾟﾘｰｸﾞ	5	1	2	2		2		3	3	2
2006	準優勝	9	4	5			6		3	8	1
2010	ｸﾞﾙｰﾌﾟﾘｰｸﾞ	4			4		1		3		4
2014	ベスト 8	3		2	1		1		2		3
2018	優勝	15	2	5	8	6	5		4	4	11
2022	準優勝	2		1	1		1	1			2

W 杯開催中とその後 2 週間のフランスフットに関する記事だけを選んで集計した．したがって，第 1 図の数値とは異なる．

キーワードの評価に関してはどうだろうか．「称賛の対象」とする記事は 1998 年と 2018 年だけに見られる．したがって，優勝した場合のみ「ブラック=ブラン=ブゥール」は疑問を挟まれない．逆に言えば，W 杯の結果に少しでも不充分な部分があれば，「ブラック=ブラン=ブゥール」は「幻想と判断」とされる．「評価の留保」は 1998 年と 2022 年以外で多い．これは，多くの時代で「ブラック=ブラン=ブゥール」が判断しにくい微妙なキーワードであることを示している．「明確な否定」は 1998 年と 2022 年に限定されるが，その詳細を把握するには，実際の記事を読む必要がある．

「ブラック=ブラン=ブゥール」の時間はどうなっているだろうか．1998 年に近いほど，記事執筆時の状況と結び付けられ，1998 年から離れるほど，過去の事象とされる．つまり，年次の進行とともにキーワードの新しさが低下する様子を示している．しかし，2018 年だけは例外的に同時代と結び付けられる．おそらく，二度目の優勝という事実の大きさを反映するものと思われる．

「ブラック=ブラン=ブゥール」の頻度と役割の変化を踏まえたうえで，以下，7 回の W 杯開催期間を対象に，ルモンド紙の記事内容を検討していく．また，それ以外で，「ブラック=ブラン=ブゥール」を含

む記事が一時的に増える 2002 年 4～5 月，2011 年 5 月，2016 年 6 月の内容も取り上げる．さらに，「ブラック=ブラン=ブゥール」と関連して「ブラック=ブラック=ブラック」の語が集中的に現れる 2005 年 11 月の記事内容にも着目する．

Ⅲ　1998 年の優勝とその歓喜

1. 突然の幸せの到来

1998 年 7 月の W 杯で突然のように出現した「ブラック=ブラン=ブゥール」は，多文化社会の理想像を示すスローガンとして注目を集めた．7 月に掲載された 7 本の記事は，時期によって 3 つに分けられる．まずは，13 日の優勝前に書かれた 3 本を示す．いずれも「ブラック=ブラン=ブゥール」のチームやそれを応援する「ブラック=ブラン=ブゥール」な人々を歓迎している．

> この水曜日の夜にサンドニのピッチに登場するのは，1998 年のとても洗練されたブラック=ブラン=ブゥールのチームであって，思い出ではない．相手はクロアチアというフットの新興国，歴史の短い新興国だ．世紀末の，トレンディな，少しポストモダンな試合で，非常に興奮する．（Jacques Buob, «Le Brésil vit un rêve français», *Le Monde*, 1998.7.9）

> フランスーイタリアの試合の視聴者の 42%が女性だった．まだ公表されていないが，フランスークロアチアの試合ではさらに数値が上がったと予想される．女性層がテレビを見るだけでなく，競技場やビストロにも足を運んでフット談議に加わり，夜にはバスチーユの酒場でブラック=ブラン=ブゥールの若者と一緒に勝利を祝う．（Jacques Buob, «La France voit la vie en bleu», *Le Monde*, 1998.7.11）

> ブルボン宮[12]の壁に張られた巨大な幕に「がんばれフランス」とある．国民議会は，会期終盤に，都市大臣クロード・バルトロンヌの表現を借りれば，“ブラック=ブラン=ブゥール”のナショナルチームを支持し，7 月 30 日まで「スポーツと民主主義」という特別展を開催することで，フットへの関心を保つことにした．（Le Monde, «Le sport s'expose à l'hôtel de Lassay», *Le Monde*, 1998.7.12）

9 日の記事は，世界一のフット大国ブラジルが準決勝でオランダを破って決勝に進み，あとはフランスが決勝に出るかどうかという直前の興奮を描いている．フランスは，1986 年のメキシコ大会でプラティニやティガナを擁して準決勝まで進んだが，「昔話はもういい」と書き，目の前の「ブラック=ブラン=ブゥール」のチームを「とても洗練された」と評して，決勝進出への期待を膨らませている．

11 日の記事は，フランスの活躍で，フットと無縁だった女性層にまで関心が広がっている状況を指摘している．大会当初，フランスでの盛り上がりは少なく，記事によれば，女性層の大半はフット嫌いだった．「女性層が（中略）ブラック=ブラン=ブゥールの若者と一緒に勝利を祝う」というのは，フットに肯定的でなかった社会の半分が，単にフットだけでなく，多文化な人々にも好意を向けるようになったことを語っている．

12 日の記事は，国民議会すなわち下院が全面的にフランスチームを支援する予定であることを報告している．もちろん目的は，支援自体ではなく，政治がフットを利用して国民からの支持を取り付けることにある．それでも，記事は，上の 2 本と同じで，社会に満ちる高揚感を伝えている．

次に，優勝直後の 2 本を示す．民衆と政治家が一体化したこと，そして「ブラック=ブラン=ブゥール」と共和国が重なったことが強調される．

> シラクは，車のスモークガラスの窓を大きく開け，嫌な顔をせずに，差し伸べられた群衆の手を握った．「ブラック=ブラン=ブゥール」のフランスと共和国の大統領は，「ミッテラン世代」の最高の時期のように，等しい熱気で交流した．首相のリオネル・ジョスパンが音もたてずに立ち去った以上，この幸運を逃すわけにいかなかった．（Le Monde, «Jacques Chirac, star à la sortie du parking», *Le Monde*,1998.7.14）

> 全て順調だ．フランスはフット世界一になり，フランス人は幸福で，国民は「三色と多色」の色，つまり青・白・赤とブラック=ブラン=ブゥールの色と和解した．全て順調だ．ジャック・シラクもそうだ．今は，喜びに水を差す時でもないし，嫌なことを話す時でもないし，列車の時間の遅れに文句を言う時でもない．幸せな時に議論は要らない．（Pascale Robert-Diard, «Le président de la République: “Nous sommes sur le bon chemin”», *Le Monde*, 1998.7.16）

14 日の記事からは，民衆と大統領との交流の情景が分かる．「首相のリオネル・ジョスパンが音もたてずに立ち去った以上，この幸運を逃すわけにいかなかった」というのは，当時，大統領が保守政党である共和国連合 RPR のシラク，首相が社会党 PS のジョスパンという「保革共存 cohabitation」の緊張状態にあり，ともに W 杯優勝を支持拡大のために使いたいと思っていたが，ジョスパンが隙を見せたので，シラクは有権者の好感を得ようと積極的になったこ

とを示している．

また，16 日の記事では，国民の祝祭気分が報じられるとともに，国の象徴である三色旗と「ブラック=ブラン=ブゥール」が並べられ，社会の分裂が解消し，人々が融和したように書かれる．また，政治的危機にあったシラク大統領も，W 杯優勝の恩恵を受けて救われたと記される．こうしたことは，後に，政治家によるフットの政治的利用という批判を受けることになるが，当時そのような声は少なかった．いずれにしても，フランスの優勝で，社会や政治に普段から不平を言うフランス人にしては珍しく至福の時を過ごし，「幸せな時に議論は要らない」，つまり幸せな時には社会や世界の問題を口にしないものだ，とされるほどの状態だった．

最後に，優勝後 1 週間を経過してからの 2 本を示す．優勝の余韻は残るものの，現実に帰っていく時期なので，冷静な見方も出てくる．

> 私達はかつて 1 つの目標と 1 つの文化に同化していた．モンテーニュ，ディドロ，コンドルセ，シャトーブリアン，ピカール大佐のフランスは，エマニュエル・レヴィナスの見事な表現によれば，私達が「出自によるのと同じように，精神と意識によって強くこだわれる」国だった．細かく注意深い系譜学者ならば，疑いなく，この移民は哲学のフランスチームで活躍したリトアニア人だとすぐに特定するだろう．実際，今や出せるメッセージは混血しかない．共和国の目標の代わりにフランスが示せるのは派手なチーム構成しかない．つまり，「ブラック=ブラン=ブゥール」のスローガンが以前の統合モデルに取って代わり，多様性が文化の位置を占めている．（Alain Finkielkraut, «Vanité française», *Le Monde*, 1998.7.21）

> 確かに郊外の団地では，もうかなり前からサンタクロースを信じていないし，日常に生じるどんな幸福も，W杯も，無限には広がらないことをよく知っている．それでも，パンタンのレ・クルティエール地区，ヴェニスューのレ・マンゲット地区，スヴランのレ・ボドット地区では，たとえ一時的で他人任せでも，外見で悪人とされる理由が消えた．また，ブラック=ブラン=ブゥールのオーケストラを粘り強く指揮し，経営者というより教育者であり，労働者階級の出身を誇りにした郷土人，エメ・ジャケ監督のお陰で，貧しい人の家系にも名誉を受ける権利があるという感情が生まれた．（Dominique Sanchez, «La banlieue, l'autre vainqueur du Mondial», *Le Monde*, 1998.7.24）

21 日の記事は，数年後に問題発言で批判されることになる哲学者アラン・フィンケルクロートが書いている．記事全体が多様性の賛歌に疑問を呈している．かつてのフランスには，ドイツのように出自や血統ではなく，フランス的な精神と意識によって一体性を保つ共和国があったが，そうした共和国が示す目標は派手なチーム構成に，統合モデルは「ブラック=ブラン=ブゥール」のスローガンに，そして文化は多様性に取って代わられたという．この哲学者は，「出自の強調，アイデンティティの詮索，エスニシティの妄想は，私達を共和国の理想から遠ざけるにもかかわらず，当然のように主張され，私達を多少とも多文化主義の米国に近づけている」とも述べる．さらに，フランスの学校教育に焦点を当て，伝統を伝えるために教師が一方的に話し，生徒が黙って聞くという理想の形を残しているのは，特権階層の学校だけで，郊外の学校では，生徒が自己のアイデンティティを強調し，他との差異や独自性を発揮するようになったと批判する．このように，記事では，「ブラック=ブラン=ブゥール」が仏共和主義の伝統を破壊するものとみなされる．

24 日の記事は，郊外や移民の問題を積極的に取り上げるジャーナリストのドミニク・サンチェズが書いている．記事は，W 杯優勝がシテの人々に名誉を感じられるようにしたとする．記事タイトルも，「郊外，W 杯のもう 1 つの覇者」となっている．ただし，それまでの記事と比べて冷静な点もある．「至福も，W 杯も，無限に広がるものではない」，「一時的」，「他人任せ」などの表現で，郊外団地シテへの差別が存続する危険性を示す．それとともに，「外見で悪人とされる」という書き方で，エスニシティを基準に犯罪者と決めつけるレイシャル・プロファイリング contrôle au faciès にも言及する．さらに，シテの人々の名誉を回復したものは，「ブラック=ブラン=ブゥール」のチームだけでなく，ジャケ監督の手腕でもあったと述べる．

このように，1998 年のルモンド紙は，「ブラック=ブラン=ブゥール」に対して歓迎や称賛の記事で埋め尽くされていたわけではなかった．理想のスローガンに躊躇する意識も部分的にはあった．

2. バラ色の世界はいつまで続いたか

2000 年の欧州選手権は 6 月 10 日～7 月 2 日に実施され，そこでもフランスが優勝した．欧州選手権関連で「ブラック=ブラン=ブゥール」を含む記事は 2 本あり，幸せの世界が続いていることが分かる．

> 政治家はすぐに察知した．自由民主所属のマルセイユ市長ジャン=クロード・ゴダンと野党の左派は，1998 年 7 月，全会一致の市議会で天才を祝福した．

“ブラック=ブラン=ブゥール”の勝利はこの出身者がもたらしたと皆が言った．スポーツの一体化と混合の美徳を認めた市議会は，マルセイユの息子とチームメイト数人に，優勝パレードをすることを提起した．（Michel Samson, «A Marseille, Zinedine Zidane continue de faire le mur», *Le Monde*, 2000.6.14）

今や，美しいチームだ．結局，チームとは何か．愛し合い，集団で仕事することだ．しかし，またもや有名なブラック=ブラン=ブゥールのチーム，フランスの民衆を構築するための統合モデルの議論が増えた．確かにそうかもしれない．だが，それはフランスチームに付きまとう疑問や思考ではない．というか，全くではないにしても，ずっと前からそうではなくなっていた．選手とは，単純にチームのあるべき姿のことだ．一致団結して仲良く，ロジェ・ルメール監督に厄介な質問はしない．選手は，一緒だから選手なのだ．（Pierre Georges, «La belle équipe», *Le Monde*, 2000.7.4）

6 月 14 日の記事は，フランスが 11 日の初戦でデンマークに快勝した 3 日後のもので，欧州選手権の最終順位が決まっていないため，1998 年の W 杯優勝の様子を呼び起こしている．すなわち，マルセイユ市議会は全会一致で，地元出身のジネディーヌ・ジダンと「ブラック=ブラン=ブゥール」のチームに肯定的な視線を送っていたと記される．

7 月 4 日の記事は，2 日の決勝の後のもので，欧州選手権での優勝によって，チームへの高い評価が続いている．しかし，「ブラック=ブラン=ブゥール」を社会統合モデルとする見方には少し懐疑的になっている．そして，「美しいチーム」とは「愛し合い」，「一致団結」するチームだとする．

「ブラック=ブラン=ブゥール」の好ましいイメージは，21 世紀に入って一転する．2001 年 10 月 6 日のフランスーアルジェリアの親善試合は，植民地支配に対する和解の象徴と期待されたが，サンドニの競技場ではアルジェリアの応援が大半を占め，試合開始前にはマルセイエーズの演奏にブーイングの口笛が吹かれ，試合後半にはピッチへ大勢の若者が乱入して試合は打ち切られた．これが，「ブラック=ブラン=ブゥール」を神話や幻想にすぎないとする転換点になった．当時のルモンド紙から，「ブラック=ブラン=ブゥール」を含む記事を挙げてみる．

他で言えないこと，とくに政治の場から締め出されて言えないことを，彼らは競技場の観客席で表現する．フランスーアルジェリアの試合のブーイングが意味することは，まずは，見捨てられたという意識，差別に反抗する意識，強者に対する弱者という先入観の意識だろう．しかし，1998 年 W 杯での“ブラック=ブラン=ブゥール”の勝利の中に，移民の子供達がシャンゼリゼで三色旗を振り，フランス的な混在がうまく機能するような象徴をあまりにも見すぎたため，競技場で起きたばかりの大暴走を考えるのは難しい．（Philippe Bernard, «Du match France-Algérie au 17 octobre 1961», *Le Monde*, 2001.10.26）

記事には，「ブラック=ブラン=ブゥール」に対する否定はないものの，1998 年と 2001 年の差への戸惑いが見出せる．この事件について，フット研究者の Gastaut（2008, pp.125-153）は次のように説明している．すなわち，親善試合の前には米国で 9.11 事件が起き，その余波でフランスのマグレブ系に圧力が掛かり，アルジェリア系のジダンも，引き分けならばフランスにもアルジェリアにも素晴らしいと言うほど神経質になっていたが，ピッチに乱入した若者の多くがパリやリヨンの郊外に住むアルジェリア系であったため，フランスとアルジェリアの和解という試みは崩れ，社会統合も失敗していることが明らかになった，としている．

ピッチ乱入事件に関して，一般にメディアはどう報道したのだろうか．Beyria（2010）は，中立的に見えても，事件を西欧とイスラムの対立と解釈したり，優位なフランスと劣位なアルジェリアという関係に置いたり，一部の人間の行為を移民系の若者全員の行為とみなしたりすることで，不平等な階層関係を構築したと述べている．上述の 2001 年 10 月 26 日付けルモンド紙の記事には，両国の矛盾が記されている．アルジェリアは，フランスから独立したにもかかわらず，国家建設より移民輩出を優先することで，国内の出業率を押さえ，移民からの外貨獲得を期待するという矛盾，フランスは，8 年間アルジェリアと戦争をしたにもかかわらず，要求が少なく，大量にいて，見慣れたアルジェリア人を労働力として国内に歓迎するという矛盾が書かれている．この書き方に，フランスとアルジェリアの不均衡な関係を見出すことは難しくない．

Ⅳ　2002 年と大統領選挙の危機

1. ルペン阻止での結束

2002 年 W 杯を間近にした 4 月，フランス大統領選挙があり，衝撃が起きた．第 1 回投票は，共和国連合 RPR のシラクが 19.9%，国民戦線 FN のルペンが 16.9%，社会党 PS のジョスパンが 16.2%で，上位 2 名が決戦投票に進んだ．反ユダヤ主義や反移民を唱える極右政党の代表が予想に反して決戦投票に残

ったので，フランス社会は大きな不安に包まれた．

ルモンド紙は，4 月 21 日の大統領選挙第 1 回投票の 2 日後から「ブラック=ブラン=ブゥール」を含む記事を急に載せ始め，5 月 5 日の決選投票の 6 日後に 2 本出して，いったん終わりとした．第 1 回投票後に記事を出現させたのは，「ブラック=ブラン=ブゥール」のスローガンをルペン阻止に使うためだった．また，決戦投票が終わって間もなく記事が消えたのは，極右台頭の危険を感じたフランス人の多くが，シラク支持か否かを問わずシラクに投票した結果，シラクが 82.2%の得票率で圧勝し，当面の脅威が消えたからだった．

W 杯開催前の 4〜5 月に多く現れた「ブラック=ブラン=ブゥール」を含む記事は，大半が無署名で，ルモンド紙として書いた点も特徴的だった．したがって，個別の論説記事ではなく，ルペン阻止の緊急性を有する記事だったと考えられる．大統領選挙に関連する記事から，「ブラック=ブラン=ブゥール」の語が出てくるパラグラフを 3 つ抜き出したい．

> デモ参加者の大半は，携帯電話で示し合わせて自発的にレピュブリック広場に流れ込んだ．グループになってメトロの出口から出てきた人々は，メルゲーズのソーセージやジェンベの太鼓の歓迎を受けた[13]．幅広い年齢層の顔を見ると，再度“ブラック=ブラン=ブゥール”のフランスを口にしたい衝動に駆られる．（Piotr Smolar, «Pourquoi on ne nous a pas dit que Le Pen allait passer ?», *Le Monde*, 2002.4.24）

> 1998 年 7 月 12 日，ブラック=ブラン=ブゥールのフランスは喜びで爆発し，感激で涙した．フランスのフットチームは W 杯で優勝し，フランスは多様な出自と統合の成功を自賛した．2002 年 4 月 21 日，人権の国フランスは悲しみに沈んだ．（Le Monde, «Carton rouge à l'extrême droite», *Le Monde*, 2002.5.3）

> 腕を組み，飛び跳ね，踊り回り，練り歩きながら，ブラック=ブラン=ブゥールな人々，そして百年単位で移民してきた層の全ての若者が中高・大学・会社・工場の友人と一緒になっている．「移民第一，第二，第三世代…．私達は皆移民の子」という言葉が繰り返される．（Le Monde, «Entre gravité et enthousiasme, 500,000 manifestants ont envahi Paris», *Le Monde*, 2002.5.3）

ルペンに反発して人々が連帯する様子を記すか，ルペンに強く懸念を表わす記事になっている．ルモンド紙は，たとえ「ブラック=ブラン=ブゥール」のスローガンに限界があったとしても，それは横に置き，ルペン阻止のために「ブラック=ブラン=ブゥール」を前面に据えたのだった．なお，普段寡黙なジダンも，この時はルペン阻止を公言し，多くのアスリートやアーティストが反ルペンで一致した．

2. W 杯での敗退

幻影化しつつあった「ブラック=ブラン=ブゥール」は，大統領選挙で復活したように見えた．しかし，W 杯が開幕し，フランスチームが負け始めると，本格的に疑問視され始めた．「ブラック=ブラン=ブゥール」の問題点は次のように論じられる．いずれもルモンド紙の記者が執筆している．

> 1998 年 7 月 12 日のシャンゼリゼには，優勝を喜ぶ大勢の群衆が集まった．いわゆるブラック=ブラン=ブゥールの群衆は，二重の三色の勝利，すなわちフランス・フットチームの勝利を祝った．（Jacques Buob, «D'un Mondial l'autre», *Le Monde*, 2002.5.30）

> ブラック=ブラン=ブゥールのチームへの言及が繰り返されてきたことは，ミシェル・カイヤにとっては，完全な統合の印というよりも，フランスの悪い病気だった．彼は，「スポーツは，身体の薬でないように，社会の薬でもない」と述べ，この 4 年間，人種差別的な思想が消えず，極右は依然として存在していると指摘する．（Serge Bolloch, «Les intellectuels et le football, de Marc Perelman», *Le Monde*, 2002.5.31）

> 私達のブラック=ブラン=ブゥールなチームは，若くして成功した人気者の団体と化し，熱狂に冷や水を浴びせるような敗北を初めて味わった．（Jacques Buob, «Cette hargne qui l'a quitté», *Le Monde*, 2002.6.7）

セネガルとの試合の前日である 5 月 30 日の記事は，記者ジャック・ブオブが書いている．大会での最終結果が出ていないので，「ブラック=ブラン=ブゥール」の語を含むパラグラフの論調は否定的ではないが，他のパラグラフのテーマはフットの変質となっている．すなわち，フットは 1998 年の W 杯で，都市から農村，郊外に至るまでフランス全体を陽気にし，社会に一体感をもたらしたが，同時にグローバル化の波に巻き込まれ，選手達はファッションショーに出たり，チャリティに関わったりして，メディアの広告塔になったと指摘する．このように，「ブラック=ブラン=ブゥール」のフランスは，もはや手離しで称賛されるものではなくなった．

続いて 5 月 31 日の記事は，1998 年の W 杯を契機にフランスの知識人がフットを論考の対象にし始めたことを示すため，フットに関する複数の著書を取り上げるものになっている．一例を挙げると，記事は，社会学者ミシェル・カイヤの指摘を紹介し，「ブ

ラック=ブラン=ブゥール」のスローガンは，社会問題を解決するものとして期待されすぎであり，決して社会統合の成功例にはならないとする．

6 月 7 日の記事は，5 月 30 日の記事と同じ書き手で,「ブラック=ブラン=ブゥール」に対する論調も等しい．ただし，5 月 30 日と違って，フットを政治に関連づけている．具体的には，1998 年はフランスの優勝でフットと政治家が良い形で結び付き，政治が安定したが，2002 年は全てが変わり，大統領選挙でのルペン台頭で 6 月 9 日の議会選挙にも重い空気が漂っていると述べる．

フランスは，5 月 31 日にセネガルに敗れ，6 月 6 日にウルグアイと引き分け，6 月 11 日にデンマークに敗れ，決勝トーナメントに進出できなかった．その後の記事は，次に掲げるように，W 杯の早期敗退という結果を踏まえ，より分析的になっている．

> 「多文化なフランス」，より厳密には，あらゆる肌の色のフランスを表象するとされた“ブラック=ブラン=ブゥール”のチームに完全な一体感を抱く若者達は，フットを使ってデマ情報と明晰な知性とを混同させる扇動者に取り込まれてきた．（中略）フットは，「皆サポーター」という偽の団結性の名のもとに，社会的不平等，失業，労働搾取をもたらし，実質的な社会関係を解体し，そしてまた「私達は勝った」という幻の国民共同体の裏に，新自由主義的な規制緩和，民営化，寡占市場などの実際の政治動向を隠し，精神のルペン化に大いに寄与してきた．（中略）1998 年の優勝で示されたスポーツの多文化主義というポリティカル・コレクトネスの夢物語，「皆一緒」の神話，「フット文化」の上で何度も繰り返される愚行は，滑稽な紙の城のように溶けて消えた．（Jean-Marie Brohm et Marc Perelman, «Football: de l'extase au cauchemar», *Le Monde*, 2002.6.18）

> ジャン=マリ・ルペンはブラック=ブラン=ブゥールのチームを否定し，「三色旗と多色な肌」のチームの選手や監督から公然と批判された．それなのに，なぜルペンが自らの選挙やイデオロギーの利益をフランスチームの成功から引き出せた，と執筆者達が言えるのか理解しにくい．[14] 執筆者達は，1998 年の優勝後に“ブラック=ブラン=ブゥール”のフランスチームが作り出した社会統合の成功という幻影を酷評する．「フットによる社会統合は，左派連合が使い続ける民衆のアヘンだ」とする執筆者達は，奇妙にも，同じようなことを言うジャン=イヴ・ルガルと変わらない．しかし，1998 年の優勝が人種差別の問題やフランス社会の統合の問題を全て魔法のように解決すると誰が言っただろうか．ほとんど誰も言わなかった．（Pascal Boniface et Christian Bromberger, «Football: réquisitoire absurde», *Le Monde*, 2002.6.25）

6 月 25 日の記事は，6 月 18 日の記事の反論になっている．両記事の対照的な態度は，「ブラック=ブラン=ブゥール」への評価に留まらず，スポーツとしてのフットの捉え方に及ぶ．

社会学者ジャン=マリ・ブロムと建築学者マルク・ペレルマンは,「戦闘的な精神，過激な愛国主義のプロパガンダ，皆が青いシャツを着て，皆がトップの人間やイコンの人物の背後に控える統一主義信仰，秩序と規律，国家ポピュリズム的な同調主義」を理由に，フットに国家主義や戦争賛美を認める．確かにその面は否定できないだろう．歴史的に見れば，フットだけでなく，オリンピックも，ナチスドイツやソビエト連邦のように，全体主義と結び付いていた．また，2001 年のサンドニでのピッチ乱入事件を念頭に,「郊外の新しい形のゲット一化と暴力を引き起こしたものは，またもやフットに他ならず，社会文化的にフットへ固執することは，人々を誘い込む罠，つまりは移民系の多くの若者にとって幻の“社会的上昇のエレベーター”となった」と書く．フットが誤ったアイデンティティになりうる点も，そのとおりだろう．移民系の若者の騒動だけでなく，競技場での人種差別的な行為やフーリガンの暴動が繰り返される．さらに，フットによる社会統合は,「左派連合が戦略として大量に作り続けた民衆のアヘン」であると述べて，W杯の成功に乗じて社会統合を達成しようとする政治家の狙いがフランスーアルジェリアの親善試合で挫折したとする．これも間違いないだろう．現実にフランスでは社会統合が進まず，分裂が深まっている．しかしながら,「精神のルペン化」，すなわち「フットは，国民戦線，より大きく言えば右派中の右派のイデオロギーの正当化に寄与し，そうした勢力は感情のペスト病に侵された有権者を引き付けることができた」という指摘は果たして妥当だろうか．

反論記事を執筆した政治学者パスカル・ボニファスと民族学者クリスチアン・ブロンベルジェが述べるように，フランスチームの成功は，多文化に否定的な極右政党の利益と反する．また，ボニファスとブロンベルジェは,「仮に執筆者達の機械論的な理屈に従うとすれば，2002 年 6 月のフランスチームの敗北後，落胆して突然血統主義のイデオロギーに染まった人々が大量に国民戦線に投票することになる．しかし，そうならず，議会選挙で極右政党は著しく後退した」と書いて，フランスのフットが大統領選挙でのルペン落選に一定の役割を果たした事実を指摘し，フットが「精神のルペン化」をもたらすとい

う主張に反論する．そして，フットを「民衆のアヘン」とするならば，フランスの多文化なフットを否定することになるので，極右勢力の考え方と違わないと言う．さらに,「敗者=貧者」の挫折に基づく「逸脱行為」がサンドニでのピッチ乱入事件の原因だとするブロムとペレルマンの見方に対しても,「フランスとセネガルの試合のように, 貧者が富者に勝つ」場合もあると説明する．つまり，フットには強弱を絶対視する「闘争的な論理の現実」が内在するというブロムとペレルマンの見方を，ボニファスとブロンベルジェは受け入れない．

2 つの記事の差には，どのような背景があるだろうか．ブロムとペレルマンはスポーツを徹底して批判する立場を取っている．元高校体育教師でもあるブロムは，スポーツが官僚・体育学・競技大会などを介して資本主義による搾取や社会主義による支配に利用されるとする（Brohm, 2019）．建築を専門としながらスポーツも論じるペレルマンは，テクノロジーの発達によって，競技場はもはや競技を行なう場でも，競技を観る場でもなく，データからサービスまで瞬時に提供されるスペクタクルの場となり，人間がますます疎外されていると考える（Perelman, 2016）．それに対して，ボニファスとブロンベルジェはスポーツ全体よりもフットに特別な関心を持っている．ボニファスは，フットが国家の政治に与える作用だけでなく，民衆の情熱に与える作用にも注目する（Boniface, 2018）．ブロンベルジェは，人々がフットのクラブチームや競技場に抱く共感や連帯的な行動を取り上げる（Bromberger, 2022）．また，ブロムとペレルマンが基本的に欧州に関心を抱く一方，ボニファスとブロンベルジェはイスラム地域にも視野を広げる．すなわち，ボニファスは地政学的な視点から，フランスでは言いにくいにもかかわらず，パレスチナを占領するイスラエルを明確に批判するし，ブロンベルジェはフランスのプロヴァンス地方だけでなく，イランを主な研究対象とする．したがって，フットに対する意識の差と地域的な関心の差がフットの捉え方の差に繋がっている．そして，それは「ブラック=ブラン=ブゥール」の評価にも通じる．ブロムとペレルマンは「ブラック=ブラン=ブゥール」への一体化は政治的な扇動者に騙されることになると言うが，ボニファスとブロンベルジェは「ブラック=ブラン=ブゥール」を酷評するのはあくまでルペンであり,「ブラック=ブラン=ブゥール」を否定的には捉えない．

Ⅴ　困惑の 2005 年と再び高揚した 2006 年

1. フランスチームへの暴言

2005 年 10 月 27 日から 3 週間，若者による暴動がフランス各地の郊外団地で連鎖した．1968 年 5 月の学生暴動以来の騒動とも言えた．暴動に参加した若者の多くはアラブ・アフリカ系[15]だったとされる．ここでは，郊外暴動と「ブラック=ブラン=ブゥール」を関連づけた発言についての記事を取り上げる．発言は，ユダヤ系の哲学者フィンケルクロートによるもので，イスラエルの日刊紙ハアレツの 2005 年 11 月 18 日付けインタビュー記事に掲載された．フィンケルクロートは，郊外暴動の背景を，人種差別や貧困への不満の表明ではなく，西欧への民族的・宗教的な憎しみだと主張した．しかし，郊外暴動を人種問題化することに反対しながら，自らは暴動の主体を人種主義的なカテゴリーで括り，かつ「人種」を強調するような言葉を発した．ルモンド紙がどのように報道しているか見てみたい．

> ハアレツ紙は「郊外団地の危機はアラブ人や黒人が被っている人種差別への反応か」と聞く．哲学者は答える．「そうは思わない．(…) フランスのチームが賞賛されるのは，ブラック=ブラン=ブゥールだからと言われる．今日，それは“ブラック=ブラック=ブラック”であり，欧州中を笑わせる．暴動の中に“フランスの人種差別への反応”を見ることは，より広い憎悪，つまり郊外の若者を駆り立てる西洋への憎悪に気づかないことになる」（Sylvain Cypel, «La voix “très déviante” d'Alain Finkielkraut au quotidien “Haaretz”», *Le Monde*, 2005.11.24）

> フランスのフットチームに言及する際に，私はフランスーアルジェリアの試合を頭に浮かべる．マルセイエーズにブーイングが起きた．このブーイングは，“ブラック=ブラン=ブゥール”のチームに対するものなので，反人種差別ではなく，人種差別になる．そして，このチームが“ブラック=ブラック=ブラック”と化し，「欧州中を笑わせる」ものになったと私は言った．これは，植民地主義のプラス面の影響を悪意無しに表現したものであり，また 1950 年代のフランスチームの選手の名前が，コパ，チソフスキー，ウイラキで[16]，フランス人がいない点に私の父が微笑んだことと同じだ．（Sylvain Cypel et Sylvie Kauffmann, «Alain Finkielkraut: “J'assume”», *Le Monde*, 2005.11.28）

フィンケルクロートは，アラブ・アフリカ系の若者による郊外暴動を，2001 年のサンドニの競技場での若者の行動と関連づけ，さらにフランスチームを黒人系ばかりだと嘲笑する．とくに最後の点が暴言

であることは言うまでもないが，全体的に誤認・誇張・曲解が多い．

フィンケルクロートは，MRAP（Mouvement contre le Racisme et pour l'Amitié entre les Peuples 人種差別に反対し，諸民族の友好を求める運動）から，人種的憎悪の扇動と挑発の罪で告発されそうになったが，すぐに謝罪したので，告発は免れた．また，暴言者がよく言い訳や開き直りをするように，フィンケルクロートも，「私達は真実の言葉を恐れている」，「私は大きな誤解の被害者」，「皆が思っていることだが」，「私は理解されなかった」などと述べたが[17]，謝罪したこと自体が過ちを認めている．

この哲学者は，1998 年のフランス優勝時には，大半の国民・政治家・メディアと異なって，喜びに浮かれず，批判的な姿勢を示した人物だった．ところが，2005 年には人種主義的な物言いを随所に入れた発言を行なった．まず，「ブラック=ブラック=ブラック」という表現であり，フランスチームを侮辱したと批判されたが，その弁解として，1950 年代のフランスチームには東欧系選手が多く，それを喜んだ父の言い方と同じようなものだと弁解する．しかし，本人はインタビューで欧州中を「笑わせる faire rire」と言い，彼の父は個人的に「微笑む sourire」ことをしたのであって，行為は全く異なる．

ハアレツ紙のインタビューでは[18]，「今や，植民地史と奴隷制のマイナス面ばかりが教えられ，植民地計画が野蛮人に文化を与え，教育する意味があったことは教えられていない」という発言まで出た．「野蛮人に文化を与え，教育する」という表現は，時代錯誤以外の何物でもない．また，仮に植民地化でアフリカが近代化したとしても，それは植民地支配の目的ではなく，口実に過ぎず，意図と帰結を敢えて混同させている．

さらに，フィンケルクロートは，ナチス占領・支配下の時代に多くのユダヤ人を収容所へ送ったフランスに対して，自身は「憎しみを持つようには教育されなかった」が，それとは対照的に，「この国はアフリカ人に何をしたというのか．良いことばかりではないか」と言って，フランスから何の被害も受けていないのに，フランスに対する黒人系の「憎しみはひどい」とインタビューで述べている．ユダヤ系への抑圧にホロコーストを持ち出しながら，黒人系への抑圧には奴隷制を持ち出さないので，論理的に成立しない．おそらく，ホロコーストに関してはまだ生きている人がいるが，奴隷制は公的に廃止されたのが 19 世紀で，それを経験した人がいないということかもしれないが，植民地で隷属状態が続いた事実は無視している．

さらに，ルモンド紙の 11 月 28 日付け記事において，本人は，「野蛮人に文化を与え，教育する」という発言の意図を，「啓蒙時代のカトリックに人々を同化することは，意図的な絶滅とは異なる．肯定的な効果も随所にありうる」と説明している．植民地支配はホロコーストと違って良い面もあるという趣旨だが，他者を野蛮人とする発言の釈明にならない．比較的穏当に思える発言でさえも，白々しさが出ている．事実，「どの集団にも私は軽蔑や憎しみを全く抱かない．フランスに新しく来た移民，とくに第二，第三世代の移民に，天職的な使命感として私は連帯を感じる」という箇所は[19]，「文明化の使命」を柱とするフランス流の植民地支配（バンセル他, 2011）の思考を連想させる[20]．

しかし，なぜフィンケルクロートはこれほどまで黒人系を侮辱して発言するのだろうか．その理由の 1 つは，ルモンド紙の 11 月 24 日付け記事から類推できる．「郊外の若者や彼らを正当化する人々は，郊外暴動が植民地支配による断裂に起因すると言う．この神学の中心的な報道官はディウドネであり，国民戦線ではなく，彼こそが反ユダヤ主義の本物の守護聖人だ」と哲学者は述べている．ディウドネは，カメルーン出身の父とブルターニュ出身の母を持つ人気コメディアンで，しばしばユダヤ系を侮辱し，そのことで罰金を受けている．しかも，ディウドネが黒人系であり，彼に共感する黒人系の人々もいるので，結果として黒人系への侮辱的な姿勢に繋がっているのではないか[21]．

もう 1 つの理由としては，「黒人」の語を，広く有色系や非白人系の意味で用いている可能性がある．そもそも「黒人」というカテゴリーは，厳密なものではなく，「黒人」とされるから「黒人」であるという想像物や構築物にすぎない（Ndiaye, 2009, 44-46）．そのため，「ブラック=ブラック=ブラック」という言い方のように，安易に使えるのだろう．

一方，ディウドネがユダヤ系をたびたび侮辱する理由は何だろうか．1 つは，パレスチナを占領するイスラエルへの反発が考えられる．ユダヤ人が即イスラエル人になるわけではないが，イスラエルの政策がシオニズムと関連する以上，イスラエルとユダヤ教を分離することは難しく，基本的にユダヤ教徒はユダヤ人とされるので，イスラエル批判がユダヤ人批判に変わる余地はある．

このような批判的な理由に加えて，ポピュリスト

的な動機も，ディウドネにはあるように思われる．ディウドネは，ホロコーストを否定する歴史修正主義者として知られ，極右のルペンとも親しい時期があり，同時にユダヤ資本に対する反発や，世界を支配するユダヤ人というような陰謀史観を持ち合わせているので，ポピュリスト的な大衆受けを狙って，飛躍した形でユダヤ人侮辱を展開しているのではないだろうか．

ところで，フランスチームを侮辱した人間としては，ルペン，フィンケルクロートの他に，社会党のジョルジュ・フレッシュが知らている．フレッシュは，南仏のラングドック=ルシヨン地域圏で首長に当たる地域圏議会議長だった 2006 年 11 月 14 日，モンプリエ都市圏議会において，「このチームに 11 人中 9 人の黒人系がいる」，「3 人か 4 人が正常だろう」，「こんなに黒人系が多いのは，白人系が無能だからだ」，「もうすぐ黒人系が 11 人になるだろう」などと発言したと，地元紙ミディ・リーブル紙の 2006 年 11 月 16 日付け記事で報道された [22]．

最も問題なのは，「正常 normalité」という表現ではないか．何が「正常」かは，フレッシュの恣意的な思考に基づいている．フランスの全人口に占める非白人系の割合を考えて，3〜4 人を許容範囲としたのだろうが，そもそもフットチームを人口構成に合わせるという発想はあり得ない．スポーツ選手は能力や経験で選ばれるのであって，社会の人口構成に従って選ばれるものではない．民主主義の制度では，議員こそ，年齢・性別・収入・職業・居住地・エスニシティなどの属性別構成比に合わせる必要がある．どうしてもフットの「異常」を批判したいのであれば，監督，クラブ会長，フランスフット連盟の上層部，審判，選手代理人の大半が白人系で占められていること（Guérin, J.-Y. et Jaoui, L., 2008, pp.117-202）を批判するべきだろう．

発言中の「黒人系が多い」，「白人系が無能」という言い方も問題がある．これは，黒人系が身体的に優れても頭脳的には白人系に劣るという人種主義の言説 [23] を暗示させる．もともと「フランスのトランプ」とされるほど問題発言の多いフレッシュだったが，モンプリエ都市圏議会での発言が決定的となって，社会党から除名された．

2. ほとんど優勝だった 2006 年

2006 年は，1998 年と同様，フット関連の「ブラック=ブラン=ブゥール」を含む記事がとりわけ W 杯開催期間に集中している．W 杯開幕前は 4 月 29 日まで遡り，W 杯閉幕後は 8 月 21 日まで間が空く．W 杯中の 9 本は，開幕直前からグループリーグ開催中の 3 本，準決勝直前から決勝直前の 5 本，決勝翌日の 1 本に分けられる．最初の 3 本は不安に満ちた段階，次の 5 本は期待が急に高まった段階，最後の 1 本は決勝の PK 戦で惜しくも敗れた落胆の段階であり，状況が異なる．最初の 3 本から紹介するが，すべてルモンド紙記者が執筆している．

> ジネディーヌ・ジダンは引退する．この引退とともに，1998 年 7 月の夜に誕生した美しい記憶，美しい夢，ブラック=ブラン=ブゥールを気に入ったフランスは霞んでいく．マルセイユのアルジェリア人の両親から生まれた彼は，ある種のフランス像，つまり自称社会統合モデルを誰よりも体現した．それは，レ・ブルーの叙事詩が消えると同時に裂け散った神話だった．2002 年，アジア開催 W 杯でレ・ブルーが大失敗したが，その直前にはジャン=マリ・ルペンが大統領選挙の決選投票に残った．「他の選択肢はあり得ない [24]」と普段は公的なコメントの少ないジダンが静かに語った．（Eric Collier, «Zidane et les Bleus: oublier 2002», *Le Monde*, 2006.6.5）

> フランスの村や町の通りには，腕を互いに組んで，世界一になったチームと同じ“ブラック=ブラン=ブゥール”の何百万ものファンが溢れ出した．確かに人々を一体化させる熱狂は短時間しか続かないことを認めよう．けれども，人々の心には，純粋で分かち合える喜びの一瞬の記憶が残った．人々は今，国中がフランスの夢のイメージ，1998 年 7 月の夜に少しの間だけ抱くことのできた夢のイメージから，どれだけ離れてしまったかを知っている．それでも，ともかくも夢は抱かれたのだった．（Jacques Buob, «Ouf ! La Coupe du monde !», *Le Monde*, 2006.6.10）

> リベリは，多様な集団の中の「白人系」ムスリムであり，和解した国のブラック=ブラン=ブゥールという寓話を瀬戸際で蘇らせる．私達は，1998 年にこの寓話を信じたがるあまり，エミール・クーエの自己暗示法に従い，最終的には言説が諸問題を解決することまで期待してしまった．（Pierre Jaxel-Truer, «Les jeunes peinent à se faire une place en équipe de France, comme dans la société française», *Le Monde*, 2006.6.19）

6 月 5 日の記事は，2006 年 W 杯で引退が予想されるジダンに焦点を当て，W 杯への期待と不安を綴る．そして，社会への期待と不安も並列させ，「ブラック=ブラン=ブゥール」を神話とする．具体的には，「ブラック=ブラン=ブゥール」が美しい記憶でありながら，現実社会では，ルペンの台頭，欧州憲法条約の否決，郊外暴動，評論家の暴言などの問題が生じてきたと指摘する．

6 月 10 日の記事は，1998 年を回顧し，「ブラック=ブラン=ブゥール」の熱狂は束の間だったが，過去の記憶としては存在していると述べる．ところが，記事の主題は別で，政治状況にある．2006 年は，翌年の大統領選挙に向けて，政権を担っている国民運動連合 UMP と次期政権を狙う社会党 PS のそれぞれの中で候補者が競い合う状況だった. UMP 側では，大統領も首相も，フランスが W 杯で優勝して政権党に有利に働くことを期待し，PS 側では，勢いのあるセロゲンヌ・ロワイヤル候補の声が W 杯の熱狂で消されることを，彼女以外の候補が期待している，と記事はまとめている．

ところで，この記事の執筆者はルモンド紙記者のブオブであり，すでに紹介した 1998 年 7 月 9 日，同年 7 月 11 日，2002 年 5 月 30 日，同年 6 月 7 日の記事も書いている．同じ記者の記事を並べると，「ブラック=ブラン=ブゥール」のスローガンに対する評価が，「称賛の対象」→「称賛の対象」→「評価の回避」→「幻想と判断」→「幻想と判断」と変わってきたことが明瞭になる．

別の記事に移りたい．6 月 19 日の記事では，フランス社会が若者に仕事や地位を与えないように，フランスチームもベテラン選手が若手選手にポジションを譲らないが，若手のフランク・リベリだけはベテランから認められ，ファンからも好かれていると記される．ただし，リベリへの支持は，彼が郊外出身の白人系ムスリムであるため「ブラック=ブラン=ブゥール」のスローガンが復活しそうなことが背景にあり，これは偽薬によるプラシボ効果だとも述べられる．

以上の 3 つの記事は，「ブラック=ブラン=ブゥール」の二面性，すなわち夢・期待・美しい記憶と，神話・自己暗示・プラシボ効果との併存を示唆している．W 杯序盤で優勝の可能性が残っている状況なので，「ブラック=ブラン=ブゥール」への幻滅を強調することもなく，かといって「ブラック=ブラン=ブゥール」に過剰な期待を込めることもない．

次に，優勝の期待が高まった期間の 5 本を取り上げる．7 月 7 日の記事を除き，「ブラック=ブラン=ブゥール」は幻想にすぎないとされる．もっとも，7 月 7 日の記事でも，「ブラック=ブラン=ブゥール」の幸福は，「少なくともパリに群衆が集まった夜だけ」という限定が付いているし，「ブラック=ブラン=ブゥール」の群衆を介しながら，郊外の「ゴロツキ」が W 杯優勝をもたらすという皮肉を伝えているので，実質的には「ブラック=ブラン=ブゥール」のスローガンに賛同していない．総じて，「ブラック=ブラン=ブゥール」を幻想とみなす 2006 年の記事は，W 杯の熱気や興奮を描きつつも，そこに冷ややかな視線を送っている．個別に見ていこう．

> 私達は束の間の社会にいて，考え方は急速に変わる．1998 年と“ブラック=ブラン=ブゥール”のフランスを思い出してみよう．多くの人は，新しい時代に入り，人間の多様性が認められるだろうと考えた．しかし，私達は結果を見てきた．だから，幻想を抱いてはいけない．私は，大きな大会から出てくる感情が非常に深いとは思わない．W 杯が終われば，人々は灰色の世界，平凡な日常へ戻っていくだろう．（Propos recueillis par Frédéric Potet, «“Tout d'un coup, une explosion positive”», *Le Monde*, 2006.7.4）

> 1998 年，フランスは社会統合モデルとしてのフットチーム“ブラック=ブラン=ブゥール”の勝利を祝った．同じスローガンが 2006 年のチームにも付いているかは明確でない．2002 年 4 月 21 日のことや，引き続く社会的差別で，誰もが慎重になっている． / ここ数日前までフランスチームの成果はほとんど無く，それによって正反対の声が通っていた．アラン・フィンケルクロートは，2005 年 11 月 18 日付けのイスラエル日刊紙ハアレツのインタビューで，郊外暴動に関連づけながら，「フランスのナショナルチームは“ブラック=ブラン=ブゥール”なので皆から称賛されると人々は言うが，今や“ブラック=ブラック=ブラック”で，欧州中を笑わせる」，と論争を呼ぶ言い方をした． / 7 月 2 日のラジオ J で政府報道官ジャン=フランソワ・コペは，「ブラック=ブラン=ブゥール」のフランスがフットの大勝利を越えて現実となる」には「するべきことがまだ多い」と認めた．（Jean-Baptiste de Montvalon et Laetitia Van Eeckhout, «L'équipe de France de football, symbole fugace d'une société qui accepterait sa diversité», *Le Monde*, 2006.7.6）

> シャンゼリゼ通りの上の方で，黒人系の若者がメガホンで叫んでいる．彼は二，三百人にマルセイエーズを歌わせている．最初のフレーズを 1 回，2 回，3 回と繰り返す人々は，1998 年の夏の歓喜を再び味わえて，あるいは少なくともパリに群衆が集まった夜だけは“ブラック=ブラン=ブゥール”を再び見出せて，とても幸せだ． / シャンゼリゼ通りの中央を 2 人の若者がプラカードを手に下りてきた．「ゴロツキが私達にワールドカップを取ってくる．すばらしいじゃないか！」と書いてある．フランスチームの「移民系出身」選手の多さに基づく見方．“ブラック=ブラン=ブゥール”の群集からまさに支持されるメッセージ．（Luc Bronner, «“Les racailles vont nous ramener la Coupe: si ce n'est pas magnifique !”», *Le Monde*, 2006.7.7）

> 皆が 1998 年の優勝で生まれた神話の崩壊を覚えている．信頼と消費と成長を取り戻せるという期待が消えるとともに，“ブラック=ブラン=ブゥール”のチー

ムという「社会統合モデル」は終わった．これに関しては，2002 年 4 月 21 日の激震が最後の幻想も壊した．今回，社会学者も経済学者も，実質的な「フット効果」の拡大や永続性にはほとんど幻想を抱いていない．（Jean-Baptiste de Montvalon, «La joie des Français paraît moins sereine qu'en 1998», *Le Monde*, 2006.7.10）

彼らは，“ブラック=ブラン=ブゥール”のフランスに幻想を持つどころか，自分達に対して，スポーツでは評価し，国民議会の議席は与えない国を非難する．「2002 年に僕達は選挙へ行かなくて，まずかった．ルペンが決戦投票に残った．次の大統領選挙は行く」と言いながら，ソフィアンヌ 20 歳は，その年のバカロレア合格者として自分の名前が載ったパリジャン紙を自慢げに見せる．（Luc Bronner, «Nous les immigrés, on est français quand on gagne le Mondial. Mais 15 jours après...», *Le Monde*, 2006.7.10）

7 月 4 日の記事は，フランスの快進撃が作る熱気について，歴史学者ジョルジュ・ヴィガレロがルモンド紙のインタビューに答える形となっている．個人主義の現代において集団が熱気に包まれる機会はほとんど消えたと考えるヴィガレロは，W 杯でそうした状況が突然生じても，深い感情にはならず，閉会とともに消えていくと説明する．さらに，W 杯の熱気によって郊外の危機を忘れる感覚になるが，それは一時の現象であり，郊外問題は教育によってこそ解決すべきと論じる．そして，熱気がもたらすものは，一緒に楽しむことであって，道徳ではないと強調する．このように，W 杯の熱気は束の間の現象であり，社会の問題や人々の道徳を変えることにはならないとされる．

7 月 6 日の記事は，ルモンド紙の記者 2 名によるもので，「ブラック=ブラン=ブゥール」が主題になっている．とくに，このスローガンに好意的，反発的，中立的な立場を載せている．実際，記事の中では，多くの発言が紹介される．パリ郊外サンドニの地域団体の創設者であるアルジェリア・カビリア系のソニア・イムルルは，「フランスの勝利は文化的な違いを全て消した．老いも若きも，黒人も白人も，皆が一緒に“フランス万歳”と叫んだ」と話す．同じくパリ郊外ムランでラジオ局のパーソナリティをしているザイール（コンゴ民主共和国）系のジョゼフ・ペルルは，「皆フランスチームの周りで感動している．街には多様性がある」と述べる．多様性を拡げるためのアフリカゴラ協会の会長であるドガド・ドグイは，「黒人選手も白人選手も，レ・ブルーの一員であり，フランス人だ．個人個人で違っても，同じ目的を共有できることをフットは示している」と言う．それに対して，国民戦線 FN のルペンは，1998 年に W 杯開催中にもかかわらず，「有色選手の割合が多すぎる」チームに「フランスを見出すことは全くできない」と攻撃し，哲学者のフィンケルクロートは，2005 年にフランスチームは「ブラック=ブラック=ブラック」になったと挑発した，という事実を載せる．中立的な意見としては，フット選手リリアン・テュラムの「フランスのフットの良いところは，黒人かどうかを問わず，単純にフランス人だからフランス人選手を祝う点だ」という発言を引用する．それとともに，保守政党の国民運動連合 UMP の所属で，政府報道官でもあるジャン=フランソワ・コペが，「ブラック=ブラン=ブゥールのフランスがフットの大勝利を越えて現実となる」には「するべきことがまだ多い」と述べたことや，フランス共産党 PCF の書記長マリ=ジョルジュ・ビュフェが，「スポーツに多くを期待しないように注意する必要がある．スポーツが全てを解決するわけではない」と述べたことを紹介する．このように，多様な意見が示されるが，それはフランス社会に多くの異なる姿勢があることも意味する．つまり，この記事は，感動の気分，差別的な暴言，冷静な発言を並べることで，社会の多文化性と分裂とを同時に示しながら，W 杯の熱狂と社会の困難な現実を並置させている．その理由は，それだけルモンド紙が熱狂や興奮に慎重であり，W 杯には社会問題を解決する力が無いと考えるためだろう．記事タイトルも，「フランスチーム，多様性をできれば受け入れたいと思う社会の儚い象徴」であり，動詞の文法の 1 つである条件法を用いながら，「受け入れたくても実際は難しい」という意味を出している点で，すでに熱気から距離を置くルモンド紙の姿勢が見て取れる．

郊外問題の取材を評価されて 2007 年にジャーナリズムのアルベール・ロンドル賞を受け，2010 年には郊外問題の著書を刊行することになるルモンド紙記者のリュック・ブロネは，7 月 7 日と 10 日の 2 本の記事を担当している．そして，W 杯開催中のアラブ・アフリカ系の若者に焦点を当てている．

ブロネの 7 日の記事の冒頭では，黒人系の若者が歓喜と熱気を創出している様子が描かれる．とくに黒人系が集団を導く場面を掲載する点に，時代の進歩が認められる．続いて，「至る所で，興奮状態の熱狂的グループが，アルジェリアとフランスの国旗を手にしながら，“ズィーズゥー！ズィーズゥー！”と不動のスター，ジネディーヌ・ジダンの名を叫んでいる」と述べられる．しかし，記事が中盤に来ると，

「無政府状態の喜びが高じて」暴動が始まったことが記される．さらに，一部のサポーターは警察と対峙したり，「サルコ[25]，おまえを＊＊＊してやる！」と叫んだと伝えられる．そして，シャンゼリゼ通りを下ってきた 2 人の若者[26]のプラカードの挿話で記事は終わる．記事の話題が，興奮→暴動→皮肉と移っているので，結局は熱気を冷ますような効果になっている．

ブロネの 10 日の記事は，パリ北東郊に位置するオルネ=スゥ=ボワの通称「3000 団地[27]」を取材したもので，主にシテの若者達の発言から構成される．若者達は，「このチームは黒人系とアラブ系が溢れる第三世界なんだ．僕らのようにさ！」と言って，W 杯での高揚感を示すとともに，「W 杯で優勝したら，僕ら移民はフランス人になる．でも，2 週間後にはフランス人でなくなっている」という定式化した言い方で，フランス人として受け入れられない疎外感を語る．一方，記者は，「2005 年 10 月から 11 月の暴動時，非常に激しい衝突があったこの地区では，フランスチームへの支持は揺るぎない．しかし，フットがフランス社会に与える影響には少しの幻想もない」と書いて，熱気と絶望が同居する状態を淡々と描く．また，記事では，若者達のアイデンティティの問題も述べられる．若者の 1 人は，レ・ブルーのシャツを買って，そこに 3000 団地の俗称を入れ，親の故郷であるモロッコに見せに行くつもりだと話す．フランス，シテ，モロッコという複数の場所アイデンティティが併存している様子が分かる．

7 月 10 日のもう 1 つの記事は，ルモンド紙の別の記者が書いたもので，7 月 4 日の記事に近い．1998 年と違って，2006 年には歓喜や熱気の中に「緊張」した空気が見られるとする．その証拠として，4 つの世論調査会社の代表的立場の役員の見解を挙げ，3 人が W 杯の効果を限定的と考えていることを紹介する．なお，1 人だけは楽観的な見通しを示すが，それについても，記者は，「最近のレ・ブルーの快進撃に付随する歓喜の場面だけ」を根拠としているので，説得力は薄いと論じる．

最後の 7 月 11 日の記事を以下に示す．決勝翌日に掲載されたもので，ルモンド紙の編集部が社説として W 杯を総括している．2006 年 W 杯中の記事を振り返ると，1 つの物語のように，最初の記事も，最後の記事も，ジダンが主役になっている．

> 他国から，フランスはしばしば理解不能な複雑さの中にあるように見える．この国は引き裂かれ，郊外のゲットーに怯え，2005 年秋の都市暴動後の人種差別主義的な反動の試練を受けながら，もろ手を上げて黒人系選手が大半の「多色」チームを賞賛する．しかし，2006 年は 1998 年ではない．1998 年には，勝利の幸福感によって“ブラック・ブラン・ブゥール”のフランスという幻想が作られ，人々を成功へ導くようなスポーツの友愛の模範例に結び付けられた．8 年後，優勝が国民に対して邪悪や不安を忘れさせるのに充分なものとは誰も思わなくなった．（Le Monde, «Tous ensemble !», *Le Monde*, 2006.7.11）

2006 年 W 杯の終わり方は，予想外に感じられるが，実際はあり得るものだった．記事によれば，当該大会には「1998 年よりも強い熱狂」があったが，それがジダンの頭突き行為で終焉を迎えたという．ジダンは，フランスが優位に進めていた試合の延長戦で，相手のイタリア人選手から侮辱的な言葉で挑発されたことに腹を立て，その選手に頭突きして，退場になった．ジダン退場の影響もおそらくあり，フランスは延長戦で勝ち越せず，延長戦後の PK 戦でイタリアに敗れた．これを踏まえて，ルモンド紙の編集部は「スポーツの熱狂のもろさ」を指摘し，「偶像は一瞬で裂かれる」と述べる．つまり，1998 年から 2002 年への急降下が，1 大会に凝縮されて再現されてしまった．そして，ジダンについては，「たった 1 つの行為で，未来の“ズィズゥ”を夢見る郊外団地の何千もの子供達の反面教師になってしまった」と短く書く．もちろん，この出来事をそれ以上は政治や社会に関連づけない．記事のタイトルも「皆一緒！」であり，頭突きを連想させるものはない．けれども，多くの読者は，「郊外団地の何千もの子供達の反面教師」という書き方に政治社会的な意味が含まれていることを読み取れる．実際，メディアでは，ジダンはアルジェリア移民の子として郊外団地に育った人間であり，ジダンの態度にはシテの若者の怒りを伴った性質が現れているという先入観的な解釈が支配的だった（Elbadawi, 2006）．ただし，もう 1 つの解釈もありえる．すなわち，ジダンの頭突きには，治安権力の侮辱的な挑発を受けるシテの若者が暴力的に反発して，それを理由に逮捕・投獄される形に似ていると考えることもできる．どちらの解釈が妥当かは分からないが，ルモンド紙の見方は前者に近いと言えるだろう．

2006 年大会の開幕当初，フランス社会では，期待と不安が混じっていたが，チームが決勝に近づくにつれて喜びが増えた．それでも，最後の瞬間で，喜びは，それを最もよく体現する選手によって突然終わった．2006 年の W 杯は，言説の面でも，現象の

面でも，W 杯フットの熱狂が束の間にすぎないことを最もよく示した大会だった．

Ⅵ　2010 年と 2011 年の混乱

1. 2010 年の暴言とボイコット

2010 年の W 杯は，前年実施の予選でハンド疑惑を伴いながら勝ち，出場権を得たものだった．その上，本大会が始まると，6 月 17 日に中心選手でストライカーのニコラ・アネルカがレモン・ドメネク監督に暴言し，19 日にはそのことがスポーツ紙のレキップ紙で暴露され，同日夕方にはフランスフット連盟が当該選手の追放を発表した．ところが，選手達は連盟の決定に反発して，20 日の練習をボイコットし，混乱を極めた．チームは 22 日に南アフリカとの試合で敗れ，グループリーグ敗退となった．

アネルカが暴言したのは，ハーフタイムにロッカールームでドメネク監督がアネルカにプレー上の指示をしたが，それに納得できなかったからだった．監督は，自伝の中で，非難されたことよりも，アネルカから「おまえ」呼ばわりされたことに傷ついたと述べている（ドメネク, 2014）．つまり，監督と選手という関係が守られなかった点をドメネクは残念に思っている．また，選手の練習ボイコットは，フランス社会でも激しく批判された．メディアの多くは，アネルカの暴言とチームの練習ボイコットに関して，チーム内に郊外出身選手や有色系選手が多いことが原因だというように，人々を範疇化して非難する論調を展開した[28]．ルモンド紙においても，そうした主張は見出せる．

さて，フット関連の「ブラック=ブラン=ブゥール」を含む記事は，6 月 12～28 日に 4 本あり，それ以前の 5 月にも，それ以後の 7 月にもない．2010 年の記事を，同じようにグループリーグ敗退で終わった 2002 年の記事と比較すれば，事態が悪化している様子が窺われる．記事を挙げてみたい．

> フット嫌いならば, 1998 年に“ブラック=ブラン=ブゥール”が作られ，4 月 21 日[29] に滑稽な形で完成したと主張するだろう．フット嫌いは最近苛々しているので，それに対して，私達は落ち着いて三段階で答えよう．まず，あの時の優勝に関しては，間抜けな人だけが夢見るような社会的効果は無いにしても，象徴的効果まで無かったとは言われていない．次に，あの時の 11 人には黒人系が今より少なく，雪の白と同じ苗字を持つリーダー[30] や，畑と同じ苗字を持つベテラン[31] が牽引していた．そしてとりわけ，1998 年から 2010 年へと，黒人系選手のタイプが変化した[32]．（François Bégaudeau, «Joue-la comme Eastwood», *Le Monde*, 2010.6.12）

> 1998 年の優勝チーム，テュラムとバルテズとジダンのブラック=ブラン=ブゥールのチームは，数ヶ月間だけ混交性を集団的な力に変えられるフランスの姿を象徴するように見えた．数日で奇跡が起きないかぎり，この W 杯から脱落する 2010 年のチームは，疑いなく技術的に欠落している．（Le Monde, «Chronique d'une déroute annoncée», *Le Monde*, 2010.6.19）

> 2006 年 W 杯で，サルコジはベルリンを訪れ，ジダンが去る試合を応援するはずだった．しかし，リリアン・テュラムが副キャプテンとして率いる「“ブラック=ブラン=ブゥール”のフランスチームからあまりにも悪く思われたため，この内務大臣は，不機嫌な状態で，決勝の夜なのにパリで秩序維持に務めなければならなかった．サルコジは屈辱を忘れず，その復讐を考えていた．そういうわけで，サルコジは自分から復讐の機会を奪った者に代償を支払わせることに決めた．（Philippe Ridet, «Nicolas Sarkozy, nouveau coach de l'équipe de France», *Le Monde*, 2010.6.25）

> 1998 年の”ブラック=ブラン=ブゥール”のスローガンはもう無い．ラサナ・ワサ 25 歳は，「チームが勝てば選手はフランス人，チームが負ければ選手はフランス国籍のアフリカ人」と言って，ご都合主義の見方を非難する．（Anne Rohou, «A la cité des Tarterêts: “C'est la France que les Bleus représentent, pas la banlieue”», *Le Monde*, 2010.6.25）

6 月 12 日の記事は，作家・脚本家で，かつてパンクロックバンドも組んだ急進左派のフランソワ・ベゴドが執筆している．白人系のベゴドは 1998 年のチームと 2010 年のチームの違いを説明する．すなわち，1999 年は白人系選手に牽引されたが，2010 年は黒人系選手が増えたと言う．また，上の引用箇所に続く部分では，1999 年の黒人系選手は節度があったが，2010 年の黒人系選手は派手で利己主義だとする．このように，問題の原因を黒人系選手に帰している．そして，「ブラック=ブラン=ブゥール」は最終的には「滑稽な形」になったと酷評する．

6 月 19 日の記事は，ルモンド紙の執筆となっている．「ブラック=ブラン=ブゥール」については，混交性を団結性に変えられる過去のチームの修飾語として用い，それ以上はこのスローガンに言及しない．記事の主題は，1998 年のチームを肯定し，2010 年のチームを否定する点にある．記事の最後でも，2010 年のチームは，1998 年のチームとは逆に，今日のフランス社会の問題を投影していると書く．具体的には，アンティルの黒人系，アフリカの黒人系，白人

系，ムスリム系，外国に行ける富者，国内に留まる貧者，郊外団地出身者，地方出身者など，さまざまな集団に分断されていると指摘する．

6 月 25 日の記事は，ジャーナリストで，ルモンド紙イタリア特派員でもあるフィリップ・リデが執筆している．主題は，当時の保守系の大統領サルコジの態度と行動にある．記事では，サルコジが個人的に何に苛立っているか，大統領としてどのような政治的対応を採るのが好ましいと考えているかが述べられる．サルコジは，フランスフットの活躍を自分の支持確保に利用したかったが，フランスチームが南アフリカで大失敗したので怒っている．しかも，サルコジには，自身の挑発的な暴言[33]を非難したテュラムや，テュラムに代表される「ブラック=ブラン=ブゥール」のチームへの恨みがある．さらに言えば，サルコジは郊外の若者を侮辱したが，同時にサルコジに屈辱を与えたフランスチームに「復讐」できる機会を狙っている．「屈辱」や「復讐」という語によって，郊外の若者とサルコジとの対立，レ・ブルーの選手とサルコジとの対立がいっそう強調される．したがって，この記事は社会の断裂を強く表現するものと言える．

6 月 25 日のもう 1 つの記事は，パリ南郊のエソンヌ県コルベイユ=エソンヌの町にあるレ・タルトレ団地を，ルモンド紙の通信員アンヌ・ロウが取材したもので，団地の若者の声を載せている．1 人は，「フランスが負け，アルジェリアが負け，ガーナがドイツに負けそうで，コートジボワールも終わった．アフリカは終了した．どこを応援すればいいのか分からない」と話す．フランスとアフリカ諸国が同列で，フランスがアフリカに属するかのような口振りになっているのは，フランスにアフリカ系選手が多いという認識だけでなく，フランスが最初に列挙され，アフリカ諸国が続いたため，「フランス」と「アフリカ」が時間的に離れ，結果的に「アフリカが終了した」ことにフランスの敗北も含まれるような発話の順序構造にも起因している．記事は他の若者の声も取り上げる．「僕達は人種差別と偽善主義で育ってきたので，もう発言には何も感じない」，「ゼムールには慣れた．最初はショックだったが，もう今はどうでもいい」など，諦めの気持ちを示す．また，「選手達の失敗は選手達の出身地と関係ない」，「私達も，元からのフランス人と同様に，アネルカの発言やレ・ブルーの態度は嫌に感じる」など，暴走する選手と郊外の若者を同一視する見方に反発し，郊外の若者もフランスチームに怒っている様子が伝えられる．そして，パリ南東郊を取材することの多い通信員のロウは，若者の発言を介して，「ブラック=ブラン=ブゥール」のスローガンを，「勝てばフランス人扱い，負ければアフリカ人扱い」の「ご都合主義」に対置させる．なお，この記事は，前の記事のように刺激的な形ではないが，アラブ・アフリカ系の若者と対立する形で，政治家サルコジ，評論家エリック・ゼムール，哲学者フィンケルクロートを配置している[34]．

まとめると，2010 年の記事は，サルコジに焦点を当てた記事とパリ南東郊のシテを取材した記事を除き，レ・ブルーを強く批判する論調で，問題点を選手の出自に関連づけている．「ブラック=ブラン=ブゥール」の評価は，2002 年の幻滅に対して，2010 年には非難になった．2010 年は「ブラック=ブラン=ブゥール」が最も否定された大会だったと言える．

2. 2011 年のクォータ事件

クォータ事件とは，フランスのインターネット紙であるメディアパルト *Mediapart* が 2011 年 4 月 30 日付け記事[35]で暴露した事件のことで，フランスフット連盟上層部が，2010 年 10 月の内部会合で問題発言したことを指す．メディアパルトの記事をもとに，発言の内容を整理してみよう．

会合では，21 歳未満のフランス・ナショナルチームに当たるエスポワールの監督エリック・モンベルツが，国立フット学院[36]への入校に関して，国籍を変える可能性のある少年を制限したいと提案する．レ・ブルー監督のロラン・ブランは全面的に賛成し，人種差別の意味ではなく，北アフリカ系や黒人系の選手を排除したいと言う．それに対して，モンベルツは在校生の 3 分の 1 がフランスを選ばない可能性があるので，30%という制限枠を示す．国認定スポーツ委員 DTN のフランソワ・ブラカールも二重国籍選手の制限に賛同する．ところが，ブランが議論の方向を変え，ユース選手のタイプに言及しながら，「他の基準」を導入することを提起する．ブラカールは，選手の資料があるので，秘密裏にクォータ quota（割り当て制）を導入しようと言う．再びブランが，身長の高さや体の屈強さで選べば黒人系選手が多くなるので，フランス文化に合うような選手を入校させようと発言する．そして，モデルとしてスペインチームを挙げる[37]．

以上の意見交換を要約すると，まず二重国籍選手の問題が指摘されるが，それはすぐに全ての二重国籍選手ではなく，マグレブ系と黒人系の選手に限定

される．やがて，ブラン監督によって，マグレブ系と黒人系の二重国籍選手の問題は，強靭な黒人系選手のプレースタイルの問題に変えられる．この場合，黒人系選手の範疇に，マグレブ系選手は含まれず，その代わり，フランス国籍のみを有する海外県アンティル出身の黒人系選手が含まれることは暗黙の了解だろう．Simon（2014）も，議論の出発点は二重国籍選手の問題だったが，有色系選手や黒人系選手という範疇が持ち出され，二重国籍の問題は論じられなくなったと述べている．

さらに，会合では，黒人系選手を制限する理屈として，フィジカルよりテクニック重視の視点が持ち出される．しかし，国立フット学院でテクニックを重視するならば，二重国籍者の制限も，黒人系選手の制限も必要ではなく，テクニック優先で入校生を選抜したいと言えば済む．そう言わないで，ブランは「人種差別の意味では無い」，ブラカールは「口に出してはダメ」と弁解や補足をしている．つまり，連盟上層部は，フランスに小柄でテクニックのある黒人選手や，大柄でフィジカルに強い白人選手がいるにもかかわらず，黒人選手=大柄でフィジカルに強い選手，白人選手=小柄でテクニックのある選手というステレオタイプを前提としている．もっとも，このようなステレオタイプの主張には限界があるので，ブランは最後には文化的に合うかどうかという基準，つまり身体能力にさえ関係しない基準を提起する．したがって，入校制限の対象が，議論の最初は二重国籍選手であったが，議論の中程では黒人系選手になり，議論の最後には欧州文化に合致しない選手になった．つまり，クォータ導入の目的は限りなく人種主義の発想に近かった．しかしながら，フランスフット連盟は，調査の結果，クォータは差別的だが導入されていないし，ブラン監督に人種差別の意図はなかったとした．

さて，エスポワールや国立フット学院では大半の選手が黒人系になっている．そうした場合，例えば米国の大学入学で実施されるような肯定的差別是正 affirmative action（英語） / discrimination positive（仏語）に基づくクォータ導入であれば，正当化されただろうか．つまり，フットに関する身体能力だけで入校生を選ぶと黒人系ばかりになるので，身体能力に劣る白人系にもチャンスを与えるという提案をすれば，正当化できただろうか．肯定的差別是正には良い面も悪い面もあり，一概に評価できない．ただし，長く不利な状況に置かれた人々は，急に公平にすると言われても，すぐに対応できないので，一定の助力をするのが肯定的差別是正であって，単に不足を補うことではない．フットにおいて，白人系が長期間にわたり社会的に不当な状態に置かれ，それが原因でフット選手になりにくいのであれば，肯定的差別是正の導入はあり得る．しかし，実際にそうなっていないのは言うまでもない．

メディアパルトの記事を踏まえ，ルモンド紙の記事を検討したい．クォータ事件に関連して「ブラック=ブラン=ブゥール」の語を含む記事は，メディアパルトの報道の反響が強い 5 月に 3 本あり，その後 3 ヶ月はない．そこで，この 3 本を取り上げる．

> 1998 年 7 月 12 日の優勝がもたらした疑いのない歴史的出来事は，2000 年の欧州選手権の成功まで続いたが，2010 年夏の大失態で正反対になり，現在進行中の事件も，その大失態の最も目に見える結果の 1 つと言える．“ブラック=ブラン=ブゥール”の時代は「ブラン=ブラン=ブラン」の時代に置き変えられるのか．（Pascal Blanchard et Yvan Gastaut, «Des dirigeants trop fermés à la question de la diversité», *Le Monde*, 2011.5.7）

> 1998 年の W 杯優勝で“ブラック=ブラン=ブゥール”のフランスを称賛した政治家やマスコミが，今ではナショナルチームの最近の失敗の責任を移民系選手に押し付けていることを，他にどう説明できるだろうか．（François Asensi, «Non au débat raciste sur l'origine ethnique des joueurs !», *Le Monde*, 2011.5.7）

> 2000 年以降，ハイレベルのアフリカ系選手の大半はパリ郊外の出身で，フット界では，この実用的カテゴリーを使うことが，1998 年の W 杯優勝後の“ブラック=ブラン=ブゥール”のスローガンで認められただけに，当然となっている．（William Gasparini, «De la fracture sociale au clivage ethnique», *Le Monde*, 2011.5.12）

1 本目は，人種主義や植民地支配の歴史研究者であるパスカル・ブランシャールと，フットや移民系の歴史研究者であるイヴァン・ガストが執筆している．記事中の「“ブラック=ブラン=ブゥール”の時代は“ブラン=ブラン=ブラン”の時代に変えられるのか」という箇所は問い掛け的だが，疑問でも，反語でもなく，警告だろう．もちろん執筆者達はそうなるとは思っていないが，フランスフット連盟の上層部が白人系で独占されている点や，フット選手を無理にフランス人アイデンティティと結び付ける世論を挙げながら，「ブラン=ブラン=ブラン」がもたらす危険性に注意を払っている．

この記事の主題は，主見出しの「多様性の問題に目を伏せる上層部」，脇見出しの「クォータの問題に直面するフランスフット」，リード文の「フランスフ

ット連盟のメンバーによる差別的発言が暴露されて以降，二重国籍選手の位置とナショナルチームの代表性をめぐって議論が激化」から分かる．つまり，連盟上層部は差別を放置し，クォータの件で批判にさらされているが，同時に社会ではフランスチームの選手がフランスを代表するか否かの議論が起きているとする．上で紹介した箇所の後には，次のような記述が続く．すなわち，1998 年の優勝のはるか前から移民系選手や植民地出身選手が信頼され，その活躍でフランスチームは維持されてきた．したがって，もしクォータが導入されていれば，フランスフットの歴史はなかった．こうした歴史的経緯が存在するので，フランスの本質は，白人的なイベリアモデルではなく，混血的なブラジルモデルにある．そして，黒人・アラブ人・アジア人をフランス人とみなさない植民地主義的な想像力から上層部は抜け切れていない．記事はこのように指摘している．記事執筆者の見解を要約すれば，歴史的にフランスのフットは多様性が当然であり，チームは二重国籍者や旧植民地出身者を中心に構成されてきた，ということになる．しかし，過去の二重国籍選手や植民地出身選手には白人系選手も含まれる．したがって，この記事は，メディアパルトが暴露した議論から，人種主義の部分を除き，二重国籍の部分を主に取り出したことになる．ただし，ブランシャールの仕事内容を考えれば，人種問題が無視されるはずはない．おそらく，フット連盟上層部が表向きは二重国籍の問題を議論しているので，それに対して，ひとまず表向きに批判したのではないか．

では，ブランシャールは平等や多様性の問題をどのように捉えているのだろうか．論考を 1 つ取り上げると，次のような考え方が見出せる（Blanchard, 2009）．多様性は，4 千万の本国人と 6 千万の非欧州系住民がいた植民地時代にも，今日のフランスにもある．しかし，前者の多様性は，エキゾチックな他者像に基づき，フランス的な規範に該当しないとされた．一方，後者の多様性は，肌の色や宗教による差を否定するフランスの平等主義に反するとされる．ところが，平等の原則があるのに，フランスでは，非白人の英雄が歴史の中で語られないという問題や，非白人の議員が少ないという問題が残っている．したがって，平等・多様性・社会統合などの既存概念に囚われている政治家・男性・白人でない存在こそが，フランスを脱植民地化させ，本当の意味で多様性を力に変えられる．ブランシャールは「人種」と平等と多様性の問題を深く考えている．

2 本目の記事は，「選手の民族的出自についての人種主義的な議論にノー！」という主見出しに，記事の内容が完全には一致していない[38]．記事は，前半で，「腹立たしい」，「共和国の価値観や憲法に反する」，「全く単純に受け入れられない」，「人種差別の表れ」，「潜在的な人種主義の発現」，「スポーツ界の誰一人も容認しない」と述べて，断固クォータ導入に反対するが，後半には論旨を変える．

この記事の執筆者であるフランソワ・アサンシはスペイン系で，長くセーヌ=サンドニ県トランブレ=アン=フランス市長と国民議会議員の地位にあり，フランス共産党 PCF に所属している．そのアサンシは，テクニックよりもフィジカルを重視する近年のフランスフットに満足できず，「アラン・ジレスからビセンテ・リザラズまでの生き生きした選手」や「シャビやイエニスタなどの名選手」，つまり「フランス版リオネル・メッシ」を輩出するよう教育しなければいけないと言う．挙げられた選手は，全員がどこかでスペインと関連する白人系で，ジレスを除き小柄であり，執筆者自身の出身地スペインとの繋がりで列挙されたのだろう．けれども，フランスの中盤を支えたジャン・ティガナやクロード・マケレレどころか，ブラジルのスター選手達の名前さえない．結局，アサンシは，フット連盟でのクォータの議論と，その人種主義的な発想を批判するものの，フィジカル重視かテクニック重視かという問題に結び付けて，最終的には白人系選手が少ないという主張を事実上展開している．フランスの基礎にある仏共和主義の原則では，正面からの人種主義的な見解はありえないが，間接的な形で人種主義的な見解に近づけることはありえると言える．

ところで，この記事にも，1 本目の記事と同じように，問い掛け的な部分がある．それは，内部会合での発言が「最高でも曖昧で下手な形で，最悪ならば人種主義を容認する形で明らかになった．私は前者の形であることをまだ信じたい」という箇所であり，執筆者の答えは，やはり前者だった．記事最後のパラグラフを参照すると，「この論争を終わらせるには，フランスフットが再び優勝し，美しいプレーを見出さなければいけない．民族別クォータの論争は，愚かしいと同時に許せないものであり，冷静な議論に変わらなければいけない」とある．抽象的に述べているが，記事の内容に基づけば，「美しいプレー」とは小柄な白人系選手が活躍すること，「冷静な議論」とはそうした選手を育てる議論のことだと受け取られても不思議はない．

3 本目の記事は，スポーツと政治を考える社会学者ウィリアム・ガスパリニの執筆で，「ブラック=ブラン=ブゥール」は，「ブラック」の語が妥当であることの根拠になるという文脈で使われる．すなわち，「黒人」という言い方は人種主義的なカテゴリーを示唆するが，現代では「実用的なカテゴリー」であり，広告でもスポーツでも便利に使われているし，郊外団地の若者が称賛するアフリカ系米国人を指すので肯定的な表現になっている，と述べられる[39]．なお，ガスパリニ自身は，郊外では行政がスポーツを支援し，少年はフットやボクシングに熱中するので，郊外がスポーツの象徴的な場所になる点に関心があり（Gasparini, 2010），「ブラック=ブラン=ブゥール」に大きな意味を与えていない．

この記事の主題は何だろうか．記事では，「クォータは差別的で不公正」であり，「“移民系”や“黒人系”の選手の能力を自然化することは人種主義的なステレオタイプを意味する」と書かれる．しかし，これは主題ではない．主題は，記事タイトルの「社会的断裂から民族的分断へ―フランスフット，人種化の罠」に示されるし，具体的な論述では「“クォータ事件”やロラン・ブランの“人種主義的”と疑われる言葉のように，民族的出自だけがメディアで注目され，社会での論争は人種問題と国籍問題に集中している」という箇所に認められる．つまり，この記事は，クォータ自体ではなく，クォータに関する議論，より広範には，フランスフットに関する議論が，社会的格差を無視し，民族的差異を強調している点を批判している．そして，これを説得的にするため，「1998年のチームの選手は，中流層や民衆層の子供で，社会的に同質だったが，2010年のチームの選手は，シテ育ちの貧しい家族の出身者と中流層の出身者がいて，同質ではなかった」と述べる．さらに，「2010年のフランス代表 23 人のうち，移民の背景を持つ選手はわずか5人しかいない」とも指摘し，移民系の問題つまり民族的な問題は，小さいにもかかわらず，大きくされすぎていると論じる．

ところが，上述したように，クォータの導入は，一部の民族的出自の選手を排除するものであって，社会的に低い階層の選手を排除するものではない．もちろん民族的出自と社会的階層が連動する面はあるが，それでも会合で論じられたクォータは民族的出自を念頭に置いている．それに対して，記事を執筆した社会学者は，マイノリティ問題を捉えるには，エスニックの点から考えるアングロサクソン流ではなく，社会階層の点から考えるフランス流でなければいけないとする．結局，この記事は，フット連盟上層部の発言への批判のように見えて，実はアングロサクソン流の視点への批判になっている．

以上のように，3 つの記事は，それぞれ関心が異なるものの，共通点もある．それは，フット連盟上層部が示す人種主義的なステレオタイプを非難しながら，この問題の根本にある人種主義にまで考察を深めない点と言える．「人種」に言及しないことが人種問題を軽減させるわけではないので，こうした姿勢はフランスの人種主義を見えなくする．

Ⅶ　2014 年の大会と 2016 年の論争

1. 再出発の 2014 年

ベスト 16 になった 2014 年の W 杯と，準優勝した 2016 年の欧州選手権は，レ・ブルーが復活し始めた大会だった．監督も，2010 年のドメネク，2012 年のブランから，ディディエ・デシャンに変わっていた．また，「ブラック=ブラン=ブゥール」を含む記事数は，2011～2013 年の 3 年間では少なかったが，2014～2016 年の 3 年間にはやや増加に転じた（第 1 図）．2014 年 W 杯中の記事は，グループリーグ開催の直前に 1 本，決勝トーナメント 1 回戦の直前に 1 本，準々決勝での敗退の 1 週間後に 1 本ある．

> 1998 年 7 月の「勝利」のフランスは，フット世界一のことしか目に入らなかった．トレーニングウエアに身を包み，フォレズ地方のアクセントで話す指導者[40]が，1 人のアイドル，11 人のロックスター，22 人のヒーローを導いた．サンナゼールの造船所からカフェ・フロールのテラスまで，フランスはついにレ・ブルーに興奮し，仏共和主義の統合モデルとされたブラック=ブラン=ブゥールのチームのお陰で自慢できるようになった．フランス人は初めて本当に自国のチームと一体化した．それは，レ・ブルーとフランス人との情熱的な関係の始まりであり，近年のフランスの醜態を歪めて映す曲面鏡だった．（Olivier Guez, «Les Bleus à l'âme française», *Le Monde*, 2014.6.14）

> 1998 年の決勝後，クレールフォンテンヌでは，配偶者，パートナー，子供を加えてパーティが開催された．手品師のショーやいろいろな企画が用意された．それは，単純な幸せがもたらす特別の喜びだった．皆が，政治家までが，私に会いたがっていた．16 年後，何も変わっていない．非常に象徴的な意味での支持がある．“ブラック=ブラン=ブゥール”のスローガンは政治に回収されてきた．残念なことに，この国の政治家達は，スローガンの裏にある適切な方向に進んでこなかった．（Propos recueillis par Rémi Dupré, «Petit: “C'est comme sous drogue”», *Le Monde*, 2014.6.28）

フランスを飲み込んだ“ブラック=ブラン=ブゥール”の波を分析しようとした文献は多い．イヴァン・ガストは，2006 年にオートルマン刊行の『現代のフットボール』で，W 杯は，「“フランスのるつぼ”の成功という民衆の幸福感をもとに移民系の同化という美徳の言説を創出し」，「優勝チームの選手の出自が二重かそれ以上だと過度に評価した」と書いている．12 年後，とくにナイズナでの大失態と不充分な結果によって，美徳で飾られたものは悪徳で飾られるものになった．しかし，ブラジル大会で活躍したデシャン監督率いるレ・ブルーへの熱狂は，フランスがひたすら 1998 年の再体験を望んでいることを示す．（Bruno Lesprit, «Le triomphe éternel», *Le Monde*, 2014.7.12）

3 本の記事は，いずれもフランスフットの歴史を振り返ることが主題となっている．「ブラック=ブラン=ブゥール」についても，1998 年の W 杯にだけ繋げようとしている．2014 年の記事で，なぜ過去の事象が多くの行数を占めるのか．それは，「ブラック=ブラン=ブゥール」を歴史的なものとすれば，現在のフランスチームに関連づけないで済むし，スローガンの評価も回避できるからではないか．

6 月 14 日の記事は，「ブラック=ブラン=ブゥール」の語を使って，1998 年の情熱的な高揚を描きつつ，同時に「局面鏡」という表現を用いて，その情熱的な高揚がフランスの本当の姿ではなかったことを暗示している．ただし，その後に続く記述はフランスフットの歴史であり，「ブラック=ブラン=ブゥール」のテーマから外れる．フランスフットの歴史に関しては，20 年間近くレキップ紙でフランスチームを取材しているヴァンサン・デュリュックの発言を引いて，「1998 年までフランス人とレ・ブルーの関係は全く無関心の域にあった」と述べられる[41]．このように，フットの歴史に焦点を絞ることで，「ブラック=ブラン=ブゥール」の語を出しながら，正面からは言及しない記事が成立する．

6 月 28 日の記事は，1998 年の W 杯決勝で 3 点目を挙げた選手エマニュエル・プティへのインタビューであり，記事の大半がプティの発言で構成されている．主題も 1998 年大会であり，プティが当時の歓喜や祝祭の様子を述べている．「ブラック=ブラン=ブゥール」に関しては，政治に取り込まれたとするものの，「ブラック=ブラン=ブゥール」に対する直接的な評価は示さず，このスローガンの目標が成し遂げられていないとすれば，それは政治家達に責任があるという見解に留めている．

7 月 12 日の記事は，ルモンド紙記者が書いたもので，前半では，2014 年大会の監督で，1998 年優勝時のキャプテンでもあったデシャンが，ナショナルチームとクラブチームで数多く優勝したことを解説する．後半に入ると，1998 年大会で選手をまとめたエメ・ジャケ監督の手腕を記すとともに，「“ブラック=ブラン=ブゥール”の波を分析しようとした文献は多い」と述べ，「ブラック=ブラン=ブゥール」に対する判断を他の文献に委ねようとする．「美徳の言説」が 12 年後，「悪徳で飾られるもの」に変化したという箇所は，「ブラック=ブラン=ブゥール」への幻滅に見えるが，「1998 年の再体験を望んでいる」と表現することで，「ブラック=ブラン=ブゥール」への期待が残っているとする．このように，スローガンは肯定側にも否定側にも揺れ，評価を定めにくいので，記事の執筆者は「波」と呼ぶのだろう．記事が書かれたのは，フランスが順々決勝で終わった 7 月 4 日の 1 週間後であり，大会を総括する意味もある．程々の成績も，肯定でも否定でもない記事の姿勢に結び付いていると考えられる．

以上のように，2014 年の記事は曖昧な論調に終始し，「ブラック=ブラン=ブゥール」への評価は，政治や社会の動向だけでなく，フランスチームの成績自体にも左右されると言える．これは，成績によっては，「ブラック=ブラン=ブゥール」が再び注目を集める余地のあることを示している．

2. 2016 年のアイデンティティ論争

2016 年は，W 杯開催年ではないが，「ブラック=ブラン=ブゥール」の語を含む記事が多い．とくに 6 月 2～11 日に集中して 11 本載っている．その次は 7 月 4 日だが，これはドイツチームに関するもので，さらにその次は 8 月 1 日まで無い．欧州選手権の期間は 6 月 10 日～7 月 10 日なので，記事の集中はフランスの欧州選手権準優勝とは関係しない．実は，11 本中 8 本がベンゼマ事件に言及し，うち 5 本が事件を主題としている．スペインのトップクラブ，レアル・マドリのスター選手であるカリム・ベンゼマ[42]は，チームメイトへの恐喝事件で 2015 年 11 月に起訴され，それによってフランスフット連盟から試合出場を禁じられた．やがて出場禁止は解かれたが，2016 年欧州選手権のフランス代表メンバーには選ばれなかった．メンバーに選ばれなかった背景について，ベンゼマがインタビューで語り，その内容が論争を起こした．ベンゼマ非選出の理由が，競技上のことなのか，以前に起訴されたことによるのか，マグレブ系の出自にあるのか，真相が分かりにくい状況だったが，ベンゼマは人種主義的な理由がある

と明言したために批判された．

インタビューはスペインのスポーツ紙であるマルカ紙が行なったもので，質問と回答が，2016 年 6 月 1 日付けのオンライン版にも掲載されている．英語ページは一部語句が省略されているので，西語ページを参照したい．質問は，「デシャンあるいはフランスフット連盟の会長は，不本意ながら圧力を受けて決定したと思うか．というのも，彼らはあなたにいつも手を差し伸べていたからだ．カントナが言うようにディディエは人種差別主義者だと思うか」であり，ベンゼマの回答は，「いや，そうは思わない．だが，彼はフランスの人種差別的な勢力の圧力に屈した．フランスでは最近 2 回の選挙で過激政党が決選投票に進んだ[43]．ディディエだけの決定かは分からない．彼とは良い関係だったし，会長とも良い関係だったからだ」となっている[44]．ベンゼマは，デシャン監督を人種差別主義者とは言わなかったが，人種差別主義的な勢力に屈したと述べた．人種問題では，自らが人種差別主義者でなくても，人種差別主義に従うことは人種差別主義者とみなされる．そういうわけで，ベンゼマは，自身が代表チームに選ばれなかった理由を人種差別に関連づけたと批判されたのだった．

以下，ベンゼマ事件に関係して「ブラック=ブラン=ブゥール」が出てくる記事を 3 つ挙げる．2 つがこのキーワードを単に過去の事象とし，1 つが専門家のコメントを引いて神話としている．「ブラック=ブラン=ブゥール」は記事の主題になりにくい．

> とくに“ブラック=ブラン=ブゥール”と称されるフランスチームが 1998 年に W 杯で優勝してから，社会の見方が変化してきた．すなわち，民族的または文化的な出自が巧みにメディアで強調され，スポーツでの成功の可能性の保証になるとされてきた．（William Gasparini, «Le football, laboratoire de l'ethnicisation de la société», *Le Monde*, 2016.6.2）

> この研究者は，「1998 年のブラック=ブラン=ブゥールのフランスは神話だ」と強調する．現在，政治家達が祖国愛や選手の模範に対して強迫観念に駆られているのは，神話の裏側を表わしているにすぎない．（Rémi Dupré et Erwan Le Duc, «Les Bleus, l'équipe de quelle France ?», *Le Monde*, 2016.6.2）

> フット界にポストコロニアルの問題が出現したのは，1998 年，つまり W 杯で“ブラック=ブラン=ブゥール”のチームが優勝した時だった．この時にフランスや世界のメディアは，混交性や多文化主義が，ジャン=マリ・ルペンの人種主義に勝ったと祝った．しかし，共和国を多文化の象徴に置き換えることで，メディアはフランス社会に害を与えた．というのも，メディアは，黒人とブゥールは白人より身体的に優れても頭脳的には劣ると主張したい国民戦線とその代表が拡散させようとするモデルを，逆の対照的な形で復唱するだけの結果になったからだ（Jean-Loup Amselle, «Cessons de prendre ces joueurs pour des “subalternes”», *Le Monde*, 2016.6.4）

まず，社会学者ガスパリニの 2016 年 6 月 2 日付け記事に注目する．ガスパリニは，クォータ事件に関する 2011 年 5 月 12 日付け記事も執筆しているが，両記事の趣旨はほぼ同じと言っていい．すなわち，移民系選手や黒人系選手というだけで特定の能力に結び付ける人種主義の見方を否定した上で，近年の議論では，経済的格差を伴った社会的階層の問題が無視され，英語圏の影響で文化的出自や民族的差異が強調されるようになったと批判する．つまりガスパリニは，階級的対立が不平等や不公平の原因であると主張し，極右に見られるような白人至上主義の言説と，郊外団地に見られるような反人種差別の言説を，ともに共同体主義として否定する．それだけでなく，エスニックな多様性を肯定する言説も，多文化主義として疑問視する．

アルジェリア系のベンゼマが外されたのは人種差別ではないだろう．同様に，チュニジア系のハテム・ベン・アルファが欧州選手権のメンバーに選ばれなかったのも，マグレブ系への差別ではないだろう．もし代表選手が民族的な出自を基準に選ばれたとしたら，世紀を揺るがす大事件になる．多文化なチームだからといって，必ず黒人系，白人系，マグレブ系が揃うわけではない．

次は，ルモンド紙記者 2 名による記事であり，前半ではベンゼマの発言が批判される．すなわち，フランス代表の黒人系選手キングスレ・コマンが記者会見で述べた発言，すなわち「人種差別はない．そんなことを言うのは滅茶苦茶だ．チームは揺れていない」という発言を載せるとともに，記者は，「選抜から外されたことの議論を政治的な舞台に移そう」とする意図がベンゼマにあると書く．そして，2011 年にクォータ導入を唱えたパリ・サンジェルマン監督のブラン，2014 年にアフリカ系選手のプレースタイルを先入観で語ったジロンダン・ドゥ・ボルドー監督のウイリー・サニョルだけでなく，2016 年 5 月に欧州選手権に出られないベンゼマやベン・アルファをフランス社会の犠牲者と言ったモロッコ系俳優のジャメル・ドゥブーズを挙げ，ベンゼマに好意的

か否かを問わず，問題発言が続く点を指摘する．

記事の後半では，政治学者エマニュエル・ブランシャールの見解が紹介される．すなわち，「フランスのフットチームは，祖国愛が低下したのではないかという幻覚と，二重国籍に対する“国への裏切り”的な脅迫観念という幻覚の溜まり場になってしまった」というブランシャールの見方が紹介され，政治家だけでなく，選手もまた「人種化」された発想に囚われている点が示される．

最後は，アフリカを主な対象とする文化人類学者ジャン=ルゥ・アムセルの執筆で，ベンゼマを支持する意見と否定する意見のどちらも批判する．多文化主義についても，ルペンの人種差別の対極に位置するが，結局は人種主義を助長するものとみなす．ルモンド紙が付けた「相方向的な人種主義の罠」という小見出しも，この論点を要約している．人種差別は人種理論とともに人種主義を構成するが，多文化主義もまたエスニシティを強調する点で間接的に人種主義に至るというのは，仏共和主義の典型的な考え方だと言える．

記事は，「こうしたポストコロニアルな枠組みこそ，今や社会における価値の模範の代わりをしているが，その社会が共和国を唯一無二の組織の原則とみなすのは逆説的だ」という記述で締めくくられる．この記述が意味するものは，次のように説明できる．すなわち，現代のフランス社会は，多文化やエスニシティを重視し，それとともに「人種」をアイデンティティ論争の中心に据えているが，そのようなフランス社会は，人間を平等とする仏共和主義の上に成り立っているので，矛盾を含んでいる．

フランスでは，差別を告発する文脈で「人種」を口にしても，人種主義者だと非難される場合が少なくない．これは，仏共和主義において「人種」概念が否定されているからに他ならない．しかし，概念の否定が，現実に存在しないことを意味するわけではない．ンディアイユが指摘するように，生物学的に間違った概念である「人種」と，差別問題を考察するための有効な道具としての「人種」は，区別する必要がある（Ndiaye, 2009, pp.35-44）．

Ⅷ　フット大国になった2018年と2022年

1. 2018年の二度目の優勝

フランスが20年振りに世界一となった2018年は，1998 年と頻繁に比較される．2018 年でフット関連の「ブラック=ブラン=ブゥール」を含む記事は，1～3 月が各月 1 本，4～6 月が皆無，7 月が 15 本，8～12 月が皆無で，1998 年や 2006 年と同様に，W 杯開催期間に集中している．そして，その記事数は，2006 年の 9 本や 1998 年の 7 本を上回る（第 1 表）．「ブラック=ブラン=ブゥール」を神話や幻想とする言説が確立しているにもかかわらず，なぜ 2018 年のルモンド紙は「ブラック=ブラン=ブゥール」の語を多用するのだろうか．記事を追っていくと，スローガンを反復するのではなく，2018 年に合った役割を与えていることが分かる．

2018 年 7 月の 15 本は，すべて準決勝進出が決まって以降のもので，準々決勝から準決勝前の 2 本，準決勝から決勝前の 7 本，優勝後の 6 本に区分できる．準決勝前の 2 本から紹介したい．

> サンドニでの“ブラック=ブラン=ブゥール”のフランスの優勝で，フットが突然社会で馴染みやすいものになったかのようだった．また，国中の歓喜で，フットが恥ずかしくない嗜好，一般的な研究対象になったかのようだった．（Adrien Pécout, «Et les grands esprits finirent par se prendre au jeu», *Le Monde*, 2018.7.9）

> 1998年の優勝時，つまり“ブラック=ブラン=ブゥール”の神話がメディアで築かれた時，フランスチームに「政治化」の現象が生じた．（Rémi Dupré, «L'équipe de France, objet politique malgré elle», *Le Monde*, 2018.7.10）

どちらの記事も，「ブラック=ブラン=ブゥール」の語に大きな役割を与えず，歴史的な出来事としている．それでは，主題は何だろうか．

7 月 9 日の記事では，ルモンド紙記者のアドリアン・ペクが，1998 年の優勝を契機に，それまでフットを無視していた研究者や知識人がフットを考察し始めたことを，何人かの逸話や体験をもとに述べる．さらに，以前からフット研究に携わってきた社会学者ステファンヌ・ボのコメントも紹介する．それによれば，フットの社会学は，1998 年以前はサポーターに関する研究にすぎなかったが，1998 年以後は社会的，経済的，政治的に大きなテーマになったという．さらに，フットの歴史家アルフレッド・ヴァールのコメントからは，学位を取得するようなブルジョワ階層と親和性が高いスポーツはラグビーであり，1998 年までフットはコンプレックスを感じさせる対象だったとされる．イギリスや南アフリカ共和国と同じで，フランスでもラグビーは白人系ないし富裕層のスポーツ，フットは非白人系ないし労働者層のスポーツという認識があるが，1998 年を境にフットへの先入観は薄らいだ．

7月10日の記事も，ルモンド紙記者による執筆で，1998年以降，フットが政治に結び付けられたことを説明する．執筆者のレミ・デュプレは，政治家が事あるごとにフットに干渉し，それによってフットが「政治化」，「過剰な象徴化」，「音響増幅装置」化したと述べる．例えば，2001年のフランスーアルジェリアの親善試合での騒動，2009年W杯予選のハンド疑惑，2010年W杯の練習ボイコット，2015年のサンドニの競技場での爆破事件，2016年のベンゼマ復帰などの際に，政治家は人々の道徳面にまで介入したと言う．もちろん記事は，主見出しの「意に反してフランスチームは政治的な事象に」にあるように，フットの政治化がチームの意に反したものであるとする．そして，フットを政治化させた起点が，1998年の優勝時に創られた「ブラック=ブラン=ブゥール」の神話だったと指摘する．

次に，準決勝から決勝前の7本を示す．フランスが決勝へ近づくにつれて，「ブラック=ブラン=ブゥール」を過去に留めておくことが難しくなっていく．まずは，7本の記事を日付順に並べてみたい．

> かつて戦争中のコンゴでは1969年にペレのプレーを見るため二国間の休戦協定[45]が結ばれるなど，フットは成功してきた．フットは，社会・文化・民族の現実を混ぜ合せたナショナルチームの美を示すことで，他者への不安を和らげることもできる．1998年のブラック=ブラン=ブゥールのチームへの民衆の大きな愛を思い起こすべきはフランス人ではない．ある日に移民でも翌日には偶像になる．地中海を渡る船には，確実に未来のジダンの遺伝子がいる．その遺伝子の子供の親や祖父母を受け入れるように努める必要がある．（Luiz Pereira da Silva, «Le football, miroir d'un multilatéralisme gagnant», *Le Monde*, 2018.7.11）

> 1998年は，“ブラック=ブラン=ブゥール”のフランスというスローガンがメディアで凄く流行った．このスローガンが大々的に戻ってきた．例えばマルセイユでは，巨大モニターを設置した広場が発煙筒の煙で一杯にならない時から，ボルテージの上がったサポーターが車を止めていた．「戦術は固い．当時，僕はまだ8歳だったが，98年のムードだ．元からのフランス人はチームに2人しかない[46]．この勝利は，ブラック=ブラン=ブゥールのフランスが依然として存在する証拠だ．これこそ忘れてはいけない」と友人4人と一緒に試合を見に来ていたファア・ムサ28歳は感激する．（Yann Bouchez et als., «“Une saveur de 98” s'empare des rues de France», *Le Monde*, 2018.7.11）

> 一度目から20年経過して，“ブラック=ブラン=ブゥール”の第二幕を開くのは避けてほしい．また，多民族的という理由で，素晴らしいフランスチームに幻想や懸念を抱くのは避けてほしい．このチームは庶民層や中流層のイメージで，パリのリュクサンブール公園に隣接する建物[47]よりも多様性がある．事実，このフランスチームは，21世紀初めの人間の大移動とグローバル化の時代のチームだ．けれども，このチームには，私達国民の社会について，何も言わせないか，ほとんど言わせないようにしてほしい．（Olivier Guez, «Épargnez-nous la rengaine du “black-blanc-beur”», *Le Monde*, 2018.7.12）

> セーヌ=サンドニ県の民衆層の町ボンディでは，群衆が教会前の広場に集まり，スクーターや車が競うようにスピードを上げ，クラクションを鳴らし出した．多くのフランス国旗とともにアルジェリアとモロッコの旗が1本ずつ，ジダンのブラック=ブラン=ブゥールのフランスを祝福した時と同じように振られている．　/　“ブラック=ブラン=ブゥール”という言い方が廃れたとしても，現在のチームは1998年と同様に美談や希望に満ちている．かつてマルセイユ北地区出身のジダンがいたが，今はボンディ出身のキリアン・エンバペがいる．（François Krug, «Depuis 1998, une histoire d'amour et de haine», *Le Monde*, 2018.7.13）

> 人気の薬剤師ムスタファ・ラルバウイは，「1998年に私が既に述べていたことだが，私達は社会的・文化的な混合の概念を作り，自分達の希望の上にブラック=ブラン=ブゥールの3Bを載せた．マーケティング的なスローガンがフットの価値を上回る必要はない．結局そんなものは消えてしまった．今もフットは3Bだが，ビジネス，ビジネス，ビジネスの3Bだ」，と溜め息を付く．Ariane Chemin, «A Trappes, le Mondial ne fait pas chanter les squares», *Le Monde*, 2018.7.13）

> 1998年夏，フランスチームの優勝で，“ブラック=ブラン=ブゥール”という友愛の新時代が開いたように見えた．レ・ブルーのアルゼンチンに対する勝利以降，「自由，平等，エンバペ」と言って，甘い幸福感が国を覆っている．楽観主義者には，二度目の優勝も手に届く所にある．最初の優勝から20年後，勝利の喜びは，仮に起きても，多分，より慎重で，より控えめで，より現実感を伴ったものになるだろう．私達は，ジネディーヌ・ジダンとチームメイトの偉業が生み出した政治的，社会的な希望が幻想にすぎないことを知っている．（Pap Ndiaye, «N'attendons pas de la victoire qu'elle change la société», *Le Monde*, 2018.7.13）

> フットは，1998年に見たように，マイノリティとマジョリティの国民の間で過剰にアイデンティティを強める．それは共和国の春だった．“ブラック=ブラン=ブゥール”は多文化の香りを高めた．世界チャンピオンになった多民族のフランスは，郊外のカビリア系やアラブ系にはジダンを介し，アルメニア系にはジョルカエフやボゴシアンを介し，バスク系にはリザラズを介し，カナク系にはカランブーを介し，アンティル系にはティエリ・アンリやテュラムを介し，各

人に歴史との一体化の可能性を与えた．　/　今度は新しいアイデンティティのシンボルを見出した．ブラック=ブラン=ブゥールの優勝後，1998 年に生まれたキリアン・エンバペだ．（Azouz Begag, «Il n'y a plus de revendication identitaire», *Le Monde*, 2018.7.13）

「ブラック=ブラン=ブゥール」に対して，1，2，7 番目の記事は肯定的と言える．優勝の可能性が高まると，「ブラック=ブラン=ブゥール」は過去のものであっても，美化された部分が前面に出され，場合によって現在に通じるものに変えられる．

1 番目の記事は，国際決済銀行の副部長が執筆している．副部長には保護貿易への反発があり，フットを自由貿易の一部として評価する．そして，1998 年の「ブラック=ブラン=ブゥール」のチームを想起しながら，地中海を渡る移民にもフットのスターが潜んでいる可能性に言及する．また，フットが一時的に戦争を止め，平和維持に役立つ点も指摘する．さらに，フットでは，国家による制限や肌の色に基づく不平等が存在せず，選手は自由に移動できると述べる．このように，保護貿易・国家主義・自己中心主義に対する多国間主義の価値がフットに見出され，その中で「ブラック=ブラン=ブゥール」も評価される．したがって，この記事では，「ブラック=ブラン=ブゥール」のスローガンが幻想から理想に引き戻されている．

2 番目の記事は，多数のルモンド紙記者や通信員が，決勝を間近にしたフランス各地の興奮と期待を報告するものになっている．1998 年と同じムードがあり，「ブラック=ブラン=ブゥール」の「スローガンが大々的に戻ってきた」とまで書く．また，非白人系を思わせる名前の若者に注目し，「ブラック=ブラン=ブゥールのフランスが依然として存在する」という声を拾う．一時的だが，「ブラック=ブラン=ブゥール」は幻滅から幸福に変化している．

7 番目の記事も，「ブラック=ブラン=ブゥール」に好意的と言っていい．冒頭では，「フットは夢を見させる．フットはアイデンティティの印で，誇りを高め，勝利の後には 1 つの国を構成する全ての差異を信じられない協同性にまとめる．フットは人々を結集させるが，政治は人々を分断する」と書かれる．そして中盤では，「時代は変わった．（中略）選手に対してアイデンティティに関する要求はもうない」と記される．さらに，1998 年と同じように，人々の間に一体感があるとされる．ただし，1998 年との違いもある．それは，混血的なアイデンティティが民族的なアイデンティティに取って代わったことだという．記事を執筆したアズズ・ベガグは，アルジェリア系の作家・社会学者であり，アルジェリア系のアイデンティティが記事の主題になっている．すなわち，アルジェリア系にとって，アルジェリアチームへの熱狂も，ジダンへの依存も，ベンゼマ不在に対する不満も，もはや不要であり，新しいシンボルとなったキリアン・エンバペがカメルーン系の父とアルジェリア系の母を持つので，記事の最後に，「アイデンティティの変容が進み，彼がフランスを作っている．それは，優勝を望まれ，夢を与えるような混血のフランス」とまとめている．ベガクの頭の中では，「ブラック=ブラン=ブゥール」のフランスは，黒人系，白人系，アラブ系というアイデンティティが別個にあり，それらが共存する状態を示すが，「混血の」フランスは，混交が進み，「ブラック=ブラン=ブゥール」に頼る必要が無くなった状態を表わすと考えられる．

一方，3，5，6 番目の記事は「ブラック=ブラン=ブゥール」を否定的に捉えている．記事の執筆者は順に，作家でジャーナリストのオリヴィエ・ゲズ，ルモンド記者のアリアンヌ・シュマン，セネガル人の父を持つ黒人史研究者のパプ・ンディアイユとなっている．

ゲズは，社会がフランスチームに再び「ブラック=ブラン=ブゥール」の幻想を抱かないように願っている．効果を失ったはずの「ブラック=ブラン=ブゥール」に，こうした不安を表明するのは，フランスの優勝で，もう一度このスローガンが復活するかもしれないからだろう．実際，1 番目や 2 番目の記事を読むと，そうした印象を受ける．ゲズは，フランスチームに対しては，21 世紀の国際化と多様化の時代の表れとするだけで充分と考え，それ以上の政治的な役割を担わせないように望んでいる．

シュマンは，パリ南西郊のイヴリンヌ県トラップの町を取材している．2000 年代にイングランドで名を馳せたマルチニク系ストライカーであるアネルカも，国民的人気俳優であるセネガル系のオマール・シィも，ここのムリジエ地区に育っており，非白人系フランス人の成功を象徴する場所の 1 つと言える．しかし，記者が観察する町に W 杯の盛り上がりはなく，「1998 年の幸福感とは違う」という．そして，住民からも話を聞き，「ブラック=ブラン=ブゥール」は商業的なスローガンに過ぎず，「ビジネス，ビジネス，ビジネス」だという発言を引き出す．

ンディアイユは，改めて 1998 年の「ブラック=ブラン=ブゥール」のスローガンが幻想であり，W 杯

の優勝が一時の現象であることを確かめる．つまり，2018 年のスローガンが「自由，平等，エンバペ」になっても，本質的には同じとみなす．けれども，ンディアイユの論調は悲観的ではない．記事全体を読めば，期待と不安，希望と懸念が併存するものになっている．すなわち，フットには 2 つの信仰があるとされる．1 つは，フットが「“友愛・寛容・敬意”を内在させる」と信じられていることだが，実際には軍事独裁政権にも利用され，「黒人は足が速い」というようなステレオタイプも助長させたという．もう 1 つは，黒人系にとって，フットは出自が不利にならない分野で，成功への唯一の道と信じられていることだが，これは一部の黒人スター選手だけに当てはまり，大半の若者には落とし穴だという．ンディアイユは，1998 年後の展開を繰り返させないため，フットにフット以上のものを期待しないこと，競技スポーツよりも学校教育を優先させることを主張する．それでも，フットには我慢，団結性，規則順守の教育効果がある点，2018 年 W 杯に対して冷笑的になってはいけない点を強調する．そして，幻想を持たないことと，レ・ブルーの快進撃を祝うことは，矛盾しないと結ぶ．

最後に，独立系ジャーナリストが執筆した 4 番目の記事について述べる．この記事は，「ブラック=ブラン=ブゥール」を肯定も否定もしないが，1998 年と 2018 年を重ねている．すなわち，同じようにアルジェリアとモロッコの国旗が振られ，シテ出身のジダンの代わりにシテ出身のエンバペの名が挙げられる．2 つの時代の違いは「ブラック=ブラン=ブゥール」の語が廃れたことだけであり，実質的には希望に満ちているとされる．

このように，準決勝から決勝前の 7 本は，興奮を抑えられない気持ちと冷静に捉えようとする気持ちが交錯している．優勝後の 6 本はどうだろうか．

> 1998 年 7 月 12 日，フランス人は通りに繰り出し，1 ヶ月前には誰も信じなかったチームを祝福した．私達は勝者の応援に急ぎ加わり，祝祭は美しく，活気づいて，“ブラック=ブラン=ブゥール”になった．その時から，フットはただのスポーツではなく，社会現象になった．世界一の選手達は，大衆紙のページからヨーグルトのラベルまで，あちこちに載せられた．私達はフットを味わい，消費し，とりわけ議論の種にした．（Alexandre Pedro, «Et la France est devenue une nation de football», *Le Monde*, 2018.7.16）

> 下った方にあるシャンのロータリーの交差路では激しいサンバが突然始まった．少年も少女も多くいた．フランスの前の W 杯優勝，1998 年の優勝を知らないか，「充分に味わっていない」世代だ．親達は 20 年間，もう決して使われることのない“ブラック=ブラン=ブゥール”の語や往年の選手の思い出話で，この世代を「酔わせて」きた．今度はこの世代が語る番だ．（Ariane Chemin et als., «Comme des coqs en pâte», *Le Monde*, 2018.7.16）

> アントワーヌ・グリーズマンは 1998 年に 7 歳で，今回の若いチームではすでに最年長の部類に入る．グリーズマンは，このチームを改めて“ブラック=ブラン=ブゥール”のフランスという政治的象徴にするのではなく，「愛されるフランス」，つまり「多様な出自の選手を多く抱える」が，積極的な「精神」を持った集団を認める．それは，「同じユニフォームのため，ガリアの雄鶏のエンブレムのため，フランスのため，皆でプレーする」点を共有する気持ちだ．（Adrien Pécout, «Griezmann, un héraut plutôt qu'un héros», *Le Monde*, 2018.7.16）

> フランスのフットが優勝して蘇ったのは古い美徳だ．第一の美徳は，皆にとっての協同性であり，滅多にないほど軽く，心地良い酔いのようなものだ．この美徳は，あらゆる回収に反発する一種の抵抗を，とくに政治に対置させる．それは，古くからの賢い国民が持つ単純な美徳であり，政治を正しく導く．今回の優勝に幻想が押し寄せることはなく，1998 年の“ブラック=ブラン=ブゥール”の幻想が起きることもなかった．（François Sureau, «La République au cœur de la victoire», *Le Monde*, 2018.7.17）

> 7 月 15 日の日曜日，フランスは，W 杯フットで初の優勝から 20 年ぶりに優勝した．フランスは，ロシア大会参加の 32 チームで唯一無敗であり，平均年齢が最も若い．しかし，優勝したフランスはどう性格づけられるのか．1958 年，1982 年，1998 年の栄光の時代と何が異なるのか．1998 年にあれほど自賛した“ブラック=ブラン=ブゥール”に匹敵する社会の進化があるのか．（Pierre Lanfranchi, «Le triomphe de la génération Y», *Le Monde*, 2018.7.17）

> 日曜日の夜に優勝したのは，本当にフランスのイメージを持ったチームなのか．疑問を投げること自体，既に答えを出し始めることになる．疑いは長く続いている．1998 年，私達は理想の社会を“ブラック=ブラン=ブゥール”のようにハイフンで結びたかった．今日，郊外の若者が「フランス万歳！共和国万歳！」と叫ぶのを，私達は神の贈り物[48]のように称賛する．（Anaïs Ginori, «Les Bleus représentent bien mieux la France que la classe politique», *Le Monde*, 2018.7.18）

最初の 2 本は，「ブラック=ブラン=ブゥール」に肯定的だが，歴史として捉えている．「1998 年 7 月 21 日」という細かい日付や「往年の選手の思い出話」という表現は，過去であることを印象づけている．

もう少し具体的に見てみよう．

ルモンド紙記者のアレクサンドル・ペドロによる7月12日の記事は，「美食，贅沢品，実存主義，サボタージュ，ロータリー状の道路など，何でもある国だが，フットはなかった」フランスが，2018年の2度目のW杯優勝で，ついに「フットの巨人になった」とする．したがって，1998年の「ブラック=ブラン=ブゥール」は，フランスが「フットの巨人」になる歴史の発端だったことになる．

多数のルモンド紙記者や通信員による7月16日の記事は，優勝直後のフランス各地の歓喜の様相を記し，その中でパリの人々は新しい世代の登場を祝っているとする．とくに「今度はこの世代が語る番だ」と書くことで，新時代の到来を示す．「ブラック=ブラン=ブゥール」も，「もう決して使われることのない」ものとされる．

残りの4本は，それぞれに情報や見解を整理して論じている．基本的に2018年のW杯を総括する記事となっているが，内容はかなり論説的で，主張が強く打ち出されている．

7月16日の記事は，ルモンド紙記者のアドリアン・ペクによるもので，選手アントワーヌ・グリーズマンを主題に据える．同時に，この選手を介して，「ブラック=ブラン=ブゥール」ではなく，「ともに生きる」ことの重要性を述べる．したがって，「ブラック=ブラン=ブゥール」は否定され，大きな役割も担っていない．グリーズマンは，攻撃から防御まで幅広くこなす選手で，優勝の立役者の1人と言える．その立役者の発言，すなわち「控え選手もチームのために働いていた．これが私達の力だ」，「多様な出自の選手を多く抱える」が，積極的な「精神」を持った集団だ，などの発言を紹介しながら，協同性が優勝をもたらしたと記事は指摘する．記事でのグリーズマンの評価は高い．記者によれば，この選手は，準々決勝ではラファエル・ヴァランヌのヘディングに繋がるフリーキックを，準決勝ではサミュエル・ウムティティのヘディングを呼ぶコーナーキックを，決勝ではポール・ポグバがシュートするためのパスを出し，チームの得点に関わった．ところが，記者は最後にグリーズマンを「金髪の青年」と記す．仏語のペリフラーズ，つまり言い換え表現だが，必ずしも「金髪」と書く必要はない．なぜ白人系である点を示したのだろうか．

記事を振り返ろう．ヴァランヌの父はマルチニク系，ウムティティはカメルーン系，ポグバの両親はギニア・コナクリ系で，いずれも黒人系に当たる．つまり，スタッキング[49]の図式に近いようにも見える．それを考えるために，他の記事も参照したい．7月13日の記事で，セネガル系の黒人史研究者ンディアイユは，黒人系であることが不利にならないフットで成功するのはごく僅かとする文脈で，希な才能の例としてエンバペ，カンテ，ポグバを挙げている．黒人系とマグレブ系の混血であるエンバペを黒人系に入れる点は，執筆者の出自が関係していると考えられる．また，同日の別の記事を見ると，アルジェリア系の作家・社会学者ベガグが，アルジェリア系にはアルジェリアに対するアイデンティティがあるが，その対象が，今では純粋なアルジェリア系であるジダンやベンゼマから，混血のベンゼマに移ったと書いている．つまり，混血の新しいフランスの誕生を歓迎するが，その混血の中にアルジェリア系が関わる点を重視している．ここで白人系の記者ペクが書いた記事に戻ると，意識の底では，白人系選手が中心となってチームが機能することへの願望があるように思われる．しかし，白人系の活躍だけでなく，競技上での黒人系との関係も述べる点は，黒人系だけに言及するンディアイユとも，アルジェリア系のアイデンティティを語るベガグとも異なる．スタッキングではないにしても，エスニシティによる役割分担を必ずしも否定しない意識ないし無意識があるのではないか．

7月17日の1つ目の記事は，作家・官僚・弁護士のフランソワ・シュロが書いている．1998年の「ブラック=ブラン=ブゥール」を幻想と言い切り，その一方，2018年の優勝チームは「協同性」，「勇気」，「団結」，「慎み深さ」の4つの「古い美徳」を蘇らせ，共和国の約束事を体現したと述べる．「協同性」は，ボールを保持してスペースを支配することではなく，ジルーのように得点しなくても貢献し，エンバペやポグバのように一瞬で決めるスタイルに示される．「勇気」は，アーサー王と円卓の騎士に相当する監督と選手に示される．「団結」は，移民系の若者にも活躍の場を与え，選手も出自に拘らずチームに応える姿勢に示される．そして「慎み」は，政治家のような「自己愛や虚言癖」を持たないデシャン監督に示される．シュロは最後に，「レ・ブルーの優勝によって私達は私達の遺産に戻れた．ランスの戴冠式と連盟祭についてマルク・ブロックが述べた有名な言葉が浮かぶ．今，戴冠されるのは国民で，国民は美徳によって王冠を授かる．また，これは最終的に一体化したフランスの祝祭であり，そのフランスは助けを借りずに独力で人権宣言の無条件の約束を

守る．それは，フランス人が愛し合える時，記憶に留められる時だ」と結ぶ．

「マルク・ブロックが述べた有名な言葉」とは何か．ブロックはアナール学派を創始したユダヤ系の歴史家で，対独レジスタンス運動に参加したが，ナチスドイツに捕まって銃殺された．ブロックは，1940年の著書『奇妙な敗北』で，「フランスの歴史を決して理解できないフランス人には2つの類型があり，ランスでの戴冠式の情景に感動するのを拒む人と，連盟祭の物語を感激しないで読む人だ」と記した[50]．「戴冠式」はランスの大聖堂で代々のフランス王が受ける宗教儀式，「連盟祭」はフランス革命の発端となったバスチーユ襲撃の1周年記念行事を指す．ブロックは 1930 年代の人民戦線を応援する文脈で述べたが，その文脈を無視し，フランス人のアイデンティティを表わすものとして，政治家がこの言葉を政治的に流用し，「回収 récupération」する例が絶えない[51]．記事執筆者のシュロは，原典の文脈を尊重しながら引用しようとしているが，古い美徳を持ち出すことは，現代のフランスを過去の価値観に組み込むことにならないだろうか．

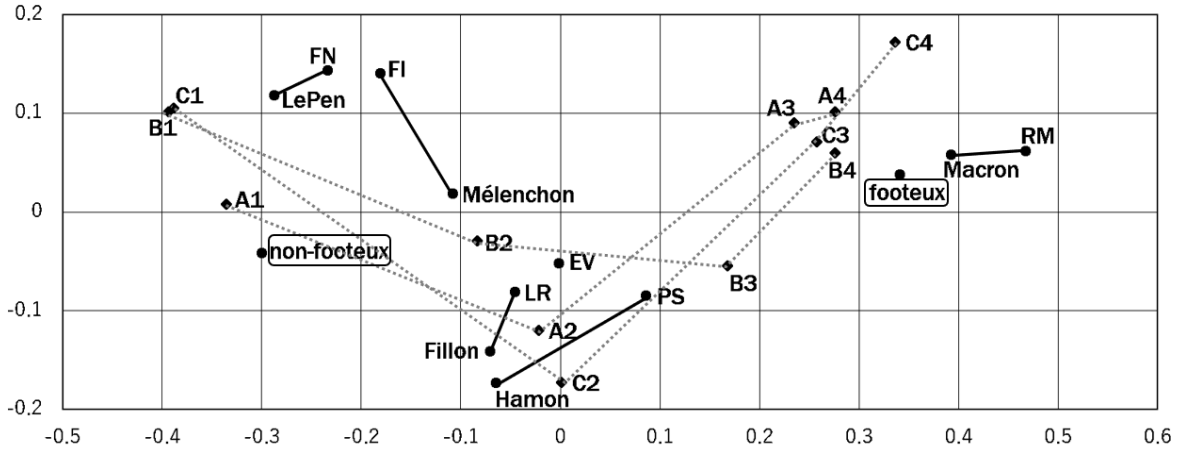
7月17日の2つ目の記事は，スポーツ史研究者で白人系のピーエル・ランフランシが書いたもので，「ブラック=ブラン=ブゥール」は否定されないが，大きな役割も与えられない．記事では，1998年のチームと2018年のチームが比較される．2018年は，フランス国内のプロチームでの経験がないまま各国の強豪クラブに所属した選手が多く，それが「モザイクな構成」と形容される．さらに，世界的企業での成功には外国で学位を取ることが重要なように，W 杯優勝のためには国内に留まってはいけないとされ，グローバルリズムが称賛される．留学や移民もグローバルリズムの一部だが，こうした指摘は，7月11日のペレイラ・ダ・シルヴァ，7月12日のゲズ，7月13日のンディアイユなど，2018年の記事に少なくない．

最後の7月18日の記事は，イタリア系のジャーナリストであるアナイス・ジノリが執筆している．「フランスの代表者は政治家ではなくレ・ブルー」という主見出しが示すように，優勝チームの長所は，政治家のように混合性を無視するのではなく，フランス社会の多様性を投影している点だとする．ジノリは，「新しい世代の選手達は，国中を和解させたのでもなく，差異や不平等や党派主義を解消したのでもなかった．この選手達の使命はそれより遥かに重いものだった．すなわち，フランス人を幸せにすることだった」と書いて，レ・ブルーに政治性を持たせることはなく，社会問題の解決を期待することもなく，単にフランス社会を反映するもの，フランス人に喜びを与えるものと評価する．「ブラック=ブラン=ブゥール」も，1998年の一時の現象として捉え，肯定も否定もしない．

2018 年のルモンド紙の記事を全体的に見れば，「ブラック=ブラン=ブゥール」のスローガンを過去のものとして切り離すか，キーワードとして現在に関連させるとしても，政治から遠ざけようとする傾向が大きい．また，フランスのフットチームには，協同性，グローバル志向，混交的な多様性が認められると指摘する傾向が強い．

1998年の「ブラック=ブラン=ブゥール」に期待されたのは，移民系の人々を統合し，極右政党の伸長を防止することだった．2 つとも完全に失敗だったのだろうか．レ・ブルーは本当に政治から解き放たれたのだろうか．しかし，政治から離れることは，社会統合の成功にも，極右勢力の阻止にも関わらないことになる．2018年のルモンド紙が賛同する協同性，グローバル志向，混交的な多様性は，社会統合の成功や極右勢力の阻止と無関係ではない．今日のフランスの社会統合には協同性や混交的な多様性が求められているし，グローバル志向と混交的な多様性は極右勢力が拒絶している．したがって，ルモンド紙が断ち切ろうとしているのは，フットと狭義の政治つまり政治家との関わりであって，フットと広義の政治つまり社会の在り方ではないと思われる．換言すれば，ルモンド紙は，多文化なレ・ブルーが W 杯で成功することで，協同性，グローバル志向，混交的な多様性の価値が証明され，少しでも社会統合の達成と極右勢力の衰退に繋がればよいと考えているのではないか．

こうした思惑はどこまで実現できているのだろうか．IFOP が実施した W 杯に関するアンケート調査の結果を参照したい．フットに対する嗜好，2017年の大統領選挙で投票した候補者と支持政党，2018年の W 杯優勝の効果に対する評価，この 3 つの関連性をコレスポンデンス分析で図化すると，明瞭な傾向が現れる（第2図）．すなわち，説明率の70%以上を占める第1軸は，「フット好き」と「フット嫌い」の対比軸で，フットに好意的な順に，中道グローバリスト RM，従来的な左派 PS，従来的な保守 LR，左翼ポピュリスト FI，極右ポピュリスト FN と並んでいる．この並びは，グローバル志向や EU 志向の強さの順もほぼ示している．また，「フット好き」で



第 2 図　政治指向と W 杯評価の対応関係

2018 年 7 月 18～19 日にフランスに住む 18 歳以上の 1,006 人に実施した IFOP のアンケート調査（*Les Français et la victoire des Bleus au mondial 2018: IFOP pour Paris Match*, IFOP, 2018）の結果を用いて，筆者が 2017 年大統領選挙の第 1 回投票先候補・支持政党と W 杯優勝の効果に対する評価との関係をコレスポンデンス分析した結果を示した．横軸は第 1 軸（説明率 72.8%），縦軸が第 2 軸（同 12.3%）．候補と所属政党を実線で結び，優勝の効果に関する質問（A，B，C）の各回答を点線で結んだ．グラフ中の表示は以下．
Macron：マクロン候補，Hamon：アモン候補，Fillon：フィヨン候補，Mélenchon：メランション候補，Le Pen：ルペン候補
RM：共和国前進，PS：社会党，EV：欧州エコロジー緑，LR：共和党，FI：不服従のフランス，FN：国民連合（旧国民戦線）
footeux：フット好き（とても好き＋やや好き），non-footeux：フット嫌い（やや嫌い＋とても嫌い）
A4～A1：フランスへの愛着や愛国心を強めた（A4=とても Yes，A3=やや Yes，A2=やや No，A1=全く No）
B4～B1：フランス人の間に相互理解の空気を高めた（B4=とても Yes，B3=やや Yes，B2=やや No，B1=全く No）
C4～C1：未来に対するフランス人の信頼感が増えた（C4=とても Yes，C3=やや Yes，C2=やや No，C1=全く No）

第 2 表　W 杯優勝の効果

	1998 年	2018 年	変化率
フランスへの愛着や愛国心を強めた（第 2 図の A4 と A3 の合計）	57%	39%	×0.68
フランス人の間に相互理解の空気を高めた（第 2 図の B4 と B3 の合計）	88%	51%	×0.58
未来に対するフランス人の信頼感が増えた（第 2 図の C4 と C3 の合計）	70%	36%	×0.51

数値は第 2 図で述べたアンケート調査の結果による．表中の変化率は 1998 年の回答と比べた場合の 2018 年の回答の比率を示す．

あるほど，W 杯優勝がフランスへの愛着を強め，国内での相互理解を高め，未来への信頼感を増やしたと感じている．簡潔に言えば，「フット好き」で W 杯の効果を最も大きく考える人は現大統領マクロンを支持する多数派であり，「フット嫌い」で W 杯の効果を最も低く考える人は極右支持の少数派になる．つまり，フット嗜好や W 杯観の違いは，マクロン対極右という最近のフランス大統領選挙の構図に重なる．そういうわけで，フランスが優勝することは，融和の空気を作り，ポピュリズムを抑え，自由貿易や EU を守ることに多少貢献すると考えられる．

2018 年の評価を 1998 年の評価とも比べたい（第 2 表）．相互理解を高める効果が最も減っている．したがって，社会を統合するための W 杯の力は弱まっている．他方，フランスへの愛着の効果は 1998 年でも低い．これは，フット嗜好がグローバル志向と連動する理由として，フットが国家意識に結び付きにくいフランスの性格があることを示唆する．

2. 2022 年の二度目の準優勝

最後に，2022 年の W 杯開催中の記事を取り上げる．2022 年大会は，エンバペはいるものの，数人の主力選手を欠き，不充分な状態で臨む大会だった．それでも，フランスは世界最強国の 1 つとして，決勝に進出することが期待され，実際にそうなった．反面，「ブラック=ブラン=ブゥール」は完全に色褪せていた．「ブラック=ブラン=ブゥール」を含む記事が 2 本だけというのも，それまでの傾向と異なった．以前は，チームが決勝に進めば記事数が増え，そうでなければ記事数が減った．ところが，2022 年は準優勝で終わったにもかかわらず，記事数が激減した（第 1 表）．

以下，該当する 2 本と，補足として，紙版ではないが，ルモンド紙の「コントル・ピエ」というブログにある 1 本を含め，計 3 本を並べておく．最初の 2 本はルモンド紙の記者が執筆し，残りの 1 本はスポーツを主に扱うジャーナリストが書いている．

2005 年の郊外暴動は今も人々の記憶にあり，スパイクシューズを履いた人間のストライキは，一部の人の目に当時の害悪全てと映っている．これでは，1 つのチームに意味を与えすぎであり，1998 年 7 月 12 日に“ブラック=ブラン=ブゥール“のフランスを共和国の社会統合モデルの成功として祝いすぎたのと同じだ．「1998 年の優勝でフットは一般的になった．私達はフットに何でも言えるようになった．勝てば社会統合の成功，負ければ社会性の欠如，共同体主義の発現とされる」，と 20 年後にニース・ソフィア・アンティポリス大学の講師イヴァン・ガストはルモンド紙に語った．（Alexandre Pedro, «La Coupe du monde, paradis ou enfer français», *Le Monde*, 2022.11.21）

1998 年のフットの偉業は，多くの政治家の頭の中に一種の神話として残った．ただし，実際には W 杯はフランス経済に効果を与えなかったし，政治に対する影響も一時的だった．ドゥサイイ，デシャン，ジダンが築いた“ブラック=ブラン=ブゥール”のフランスは確かに称賛されたが，国民戦線の台頭は止まらなかった．要するに，フットは国の根深い問題を，その内容に関係なく，解決することが全くできなかった．（Raphaëlle Bacqué, «Quand les présidents entrent en jeu», *Le Monde*, 2022.12.19）

フランスチームは，1998年の思いがけない優勝に急いで意味を与えようと左派政治家が付けたブラック=ブラン=ブゥールのラベルを最終的に取り除くことができた．また，フランスチームは，選手達の団結心によって，チームのアイデンティティそのものになった多文化なチーム構成に対する右派の批判も黙らせることができた．非政治化され，ベンゼマ，ポグバ，カンテなどのハイレベルの選手を欠き，最高のチームでないにしても，このチームは今やフランスがフット大国であることを示した．（Olivier Villepreux, «La France est une grande puissance… du football», *Le Monde*, Contre-pied: le sport où on ne l'attend pas, 2022.12.13, https://www.lemonde.fr/blog/contre-pied/）

1 本目は，2018 年 7 月 16 日付けの 1 つの記事を書いたルモンド紙記者によるもので，2022 年大会のフランス最初の試合の前日に掲載された．記者は，フランスが 1998 年の優勝以来，成功と挫折を繰り返してきたとする．さらに記者は，この起伏と連動させるように，フット研究者の発言を紹介し，フランスのフットと，そのイメージである「ブラック=ブラン=ブゥール」は，良くも悪くも過剰な意味を与えられてきたとする．

2 本目は，ルモンド紙記者のラファエル・ベケによる記事で，フットと政治家の関係をまとめている．1998 年の W 杯開幕前，選手の名前さえ知らなかった当時の大統領シラクは，フランス優勝の際に，選手の頭にキスするというパフォーマンスまで見せ，自身の支持率を 15%上げたと書く．しかし，「ブラック=ブラン=ブゥール」のチームは称賛されたものの，フランスの政治・経済に望ましい作用をもたらすことはなく，国民戦線 FN という過激政党の台頭を防ぐこともできなかったとも述べる．

3 本目は，ジャーナリストで著作家のオリヴィエ・ヴィルプルゥーによる記事で，「ブラック=ブラン=ブゥール」の発端から帰結だけでなく，最新の状況まで説明している．フランスチームは政治家が好む「ブラック=ブラン=ブゥール」のスローガンから自由になったが，多文化なチーム構成は変わらず，むしろ選手間の団結が高まったことで，アフリカ系が多いという評論家からの批判を跳ね返し，結果として政治とフットを切り離したと指摘する．

3 本の記事を総合すると，2022 年のルモンド紙は，政治家が「ブラック=ブラン=ブゥール」を利用することも，そこに社会問題の解決を期待することも無理であり，フットはようやく政治から解放されたと論じている．実際，2022 年には頻度も大幅に減った以上，「ブラック=ブラン=ブゥール」はキーワードの役目を終えたと考えられる．

しかし，次の時代に引き継がれるものは何か．答えは 3 本目の記事にあると思われる．すなわち，現代的な意味での協同性だろう．3 本目の記事に付けられた写真の選手はウスマン・デンベレであり，記事中に名前が列挙された「マンダンダ，ディサシ，コナテ，ヴァランヌ，カマヴィンガ，チュアメニ，フォファナ，ヴェレトゥ，ゲンドゥジ，コロ・ムアニ，コマン[52]」と合わせれば，フランスのフットチームはますます黒人系選手中心になる可能性がある．しかし，米国の短距離リレーチームやバスケットチームをことさら黒人系中心のチームと言わないように，いつの日かフランスのフットチームも，そのように言われることがなくなるに違いない．

Ⅸ　おわりに

「ブラック=ブラン=ブゥール」は，突然 1998 年に社会統合の理想モデルの意味を担わされたが，2001 年のフランスーアルジェリアの親善試合を境に懐疑的に見られるようになり，今では完全に神話や幻想とされている．しかし，本稿では，より深く「ブラック=ブラン=ブゥール」を捉えるため，時間軸に沿ってフランスの代表的新聞であるルモンド紙の記事を分析してきた．分析の詳細は繰り返さず，分析から引き出せる要点を 3 つにまとめたい．

まず,「ブラック=ブラン=ブゥール」への評価が同じでも，時期によって差があることが指摘できる．「ブラック=ブラン=ブゥール」が神話や幻想とされても，2006 年と 2018 年のように，位置づけ方に違いが見出せた．また,「ブラック=ブラン=ブゥール」が肯定される場合でも，1998 年と 2018 年では肯定の方向性に違いが認められた．さらに,「ブラック=ブラン=ブゥール」への判断が留保される際には，その意図は年次によって異なった．このような差は，多文化主義や共同体主義に引き付けられがちな「ブラック=ブラン=ブゥール」が，政治・社会の動向の影響を受けながら，仏共和主義とどう折り合いを付けたか，あるいは付けられなかったかという軌跡を表わしていると考えられる．

加えて,「ブラック=ブラン=ブゥール」に対する差は，個々の執筆者の民族的な出自や地域的な関心にも影響されることが分かった．黒人系の執筆者ならば黒人系選手に，白人系の執筆者ならば白人系選手に，マグレブ系の執筆者ならばマグレブ系選手に，それぞれ焦点を当てる傾向が相当程度に見られた．これは，フランスにはエスニシティに基づく複数のアイデンティティが存在することを示す．地域的な関心については，イスラム文化圏に関心があるか，キリスト教文化圏に関心があるか，ユダヤ的な世界に関心があるかで,「ブラック=ブラン=ブゥール」への評価が異なる傾向も部分的に見られた．

次に，四半世紀の歴史で「ブラック=ブラン=ブゥール」がどのようにして意義と役割を完了させたかが明らかになった．この語は，1998 年以降，フランスが W 杯決勝に進むと, メインテーマやパラグラフの次元で扱われ，当該語を含む記事も増えたが，W 杯で不振の場合には，フレーズの次元に留められ，記事数も減った．ところが，2022 年には，準優勝したものの，こうした傾向は当てはまらなくなった．したがって,「ブラック=ブラン=ブゥール」については，2002 年にスローガンの役目に疑問を持たれ，2010 年にスローガンの役目を終え，2022 年にはキーワードの役割も果たし切ったと言える．その理由は，以下に示すことができる．

第 1 に,「ブラック=ブラン=ブゥール」が肌の色やエスニシティの差異をもとにしている以上，人間の平等を重視する仏共和主義の原則と相容れない点が挙げられる．第 2 に，2018 年からフット界のトップスターになったエンバペは，黒人系とマグレブ系の混血であり，エンバペのような区分が不明瞭な選手が増え，実際の構成面で「ブラック=ブラン=ブゥール」が崩れてきた点が挙げられる．第 3 に，逆さ言葉や英語を含んだ語呂の良い表現も，時間とともに色褪せ，表現としての効果や価値が少なくなってきた点が挙げられる．

ルモンド紙の分析では，もう 1 つ重要なことがあった．それは,「ブラック=ブラン=ブゥール」を引き継ぐものとして，レ・ブルーの協同性が提示されたことだった．協同性が強調される背景には，実情として，選手間に民族的，社会的，文化的な差があることは間違いない．したがって，協同性の言説が選ばれることは，理想から幻滅へと変異してきた「ブラック=ブラン=ブゥール」が，評価や判断と関係のない純粋な実態になったことを意味する．

政治や経済では,「ブラック=ブラン=ブゥール」は，スローガンどころかキーワードにさえなっていない．そういう意味では，フットの「ブラック=ブラン=ブゥール」が社会で大きな反響を呼んだことは意義がある．けれども，このスローガンを言い続けることは，選手の出自に焦点を当て続けることになる．実際，多様だから支持できる，白人系が大半ならば支持できる，黒人系が多いから支持できる，シテ出身者も多いから支持できる，キリスト教徒が中心なので支持できる，ムスリムも入っているので支持できるなど，全てが仏共和主義に反することになる．そこで，ルモンド紙は，2018 年の優勝を利用して，チームに協同性があれば支持できるという立場を示した．ただし，これが神話や幻想でない保証はない．「ブラック=ブラン=ブゥール」が，人種主義を否定しようとして，多文化主義や共同体主義を流布させたと言うのであれば，協同性も，普遍的な価値観を提示しようとして，特定のイデオロギーを強要することにならないとは言えない．

本稿の中心は,「ブラック=ブラン=ブゥール」の言説の変化を時間的に追うことだった．したがって，空間的な分析が残った．空間的な分析にもいろいろあるが，とくに「ブラック=ブラン=ブゥール」のキーワードやそれを含む記事がどのような場所に言及しているか，あるいは記事で言及される場所が変わることによって記事内容がどう変異するかに着目する必要がある．これを次稿への課題としたい．

（東京都立大学都市環境学部）

付　記

本研究は JSPS 科研費 JP23K01001 の助成を受けた．

注

1）Laurence Rizet, «Culture - Black Blanc Beur : plus que de la danse, du lien social», *LePetitJournal.com*, 2006.12.7 - https://lepetitjournal.com/culture-black-blanc-beur-plus-que-de-la-danse-du-lien-social-167980

2）本稿では，サッカーの仏語「フットボール」の略語「フット」を使い，ワールドカップを「W 杯」と記す．

3）極右勢力である国民戦線 FN の指導層にフット嫌いが多いことは，次のルモンド紙記事にも詳述されている．Olivier Faye, «Le football, un sport qui hérisse le Front national», *Le Monde*, 2016.6.8

4）ルモンド紙では「ブラック=ブラン=ブゥール」の語を 1 度しか使わない記事が多い．理由は，この語が，「黒人系」，「白人系」，「ブゥール」のような個別的な表現ではなく，包括的な表現だからだろう．したがって，記事中の頻度よりも記事中の有無が重要と思われる．

5）2000 年以前はルモンド紙の公式サイト（https://www.lemonde.fr/），2001～2022 年は学術データベース ProQuest で記事検索した．公式サイトにあるオンライン版記事の掲載日と紙版記事の日付は一致しないことがあるが，オンライン版記事には紙版記事の日付も記されている．ProQuest は紙版記事を載せている．なお，検索と分析は次のようにした．①“Black-Blanc-Beur”，“Black, Blanc, Beur”，“Black Blanc Beur”だけでなく，複数形の“Blacks Blancs Beurs”なども検索して分析対象に含め，1 例あった“Black, Blanche, Beur”も文法の誤りなので含めた．②重複して表示される記事，見出しだけの記事，極端に短い記事，イベントのプログラム的な記事，人物の年表的な記事も検索されたが，分析対象としなかった．③「ブラック」，「ブラン」，「ブゥール」が別々に出てくる記事，「ブラック」，「ブラン」，「ブゥール」の順でない記事，「ブラック=ブラン=ブゥール=イエロー」のように別の要素が入る記事，「ブラック，ブラン，そしてブゥール」のように列挙する記事は，「ブラック=ブラン=ブゥール」のスローガンやキーワードと異なるので除いた．

6）ルモンド紙だけでなく，社会やメディア全体が「ブラック=ブラン=ブゥール」の語を肯定的に使った．

7）次のような記事になっている．「1984 年結成のパイオニア的なヒップホップグループ“ブラック=ブラン=ブゥール”，通称“B3”は，1997 年の作品“ランバレナ“で壁を越えた．バッハとガボンの伝統音楽を混合した曲に合わせて，振付師クリスティンヌ・クダンがアフリカ的な幻覚から直接湧き出る亡霊の世界を描いた」（Rosita Boisseau, «Black Blanc Beur célèbre le mariage achevé du hip-hop et de la danse contemporaine», *Le Monde*, 1998.4.10）．

8）次のような記事になっている．「ママドゥ・ヤファ，別名マムスは，パリ 18 区のブラック=ブラン=ブゥールな界隈であるグット・ドールを代表する 1 人だ．生後 3 ケ月で来て以来，ずっとグット・ドールに暮らし続け，地区内の若者の文化・スポーツ・学業の手助けをする団体「黒檀のエスプリ」を創設したところだった」（Catherine Bédarida, «Une Coupe du monde pour les jeunes de banlieue», *Le Monde*, 1998.4.14）．

9）フランスでは，スポーツクラブでフットをする人は多いが，ツール・ド・フランスなどに比べ，W 杯は盛り上がりに欠ける部分もあった．現在，フランスはブラジルと並ぶ世界トップに位置するが，最低でも準決勝まで行かなければ，社会の大きな関心を得られない．

10）例えばブラジル，ドイツ，ベルギー，南アフリカ共和国などに関して「ブラック=ブラン=ブゥール」の語が出てくる記事は除いた．

11）日本語文献では，陣野（2018）が 1998～2018 年のフランスに関する W 杯の 20 年を概観して，的確にまとめている．他方，本稿は，ルモンド紙に絞り，2022 年も含めて，「ブラック=ブラン=ブゥール」に焦点を当てるとともに，社会や政治の問題をより詳細に論じる．

12）ブルボン宮は，下院に当たる国民議会が使う建物なので，「国民議会」の意味にもなる．

13）「メルゲーズ」はマグレブのソーセージ，「ジェンベ」は西アフリカの太鼓で，デモにアフリカ的要素を歓迎する空気があったことが示されている．

14）「/」印は，間に別のパラグラフが入り，「/」前後の文章が内容的に続いていないことを示す．なお，「…」は，原文で「…」となっていること，「（中略）」は，筆者が文章を略したことを示す．以下，本稿では同様にする．

15）フランスでは「マグレブ・サブサハラ系」と言わず，しばしば「アラブ・アフリカ系」と言うが，この時の「アラブ系」は北アフリカのマグレブ系，「アフリカ系」は黒人系すなわちサブサハラアフリカ系を指す．

16）コパ，チソフスキーはポーランド系，ウイラキはハンガリー系．

17）1 つ目の表現は本文で紹介した 11 月 24 日付け記事，2～4 つ目の表現はオンライン版記事（Le Monde avec AFP, «M. Finkielkraut s'excuse pour ses propos dans le quotidien israélien “Haaretz”», *Le Monde*, 2005.11.25），5 つ目の表現は本文で紹介した 11 月 28 日付け記事による．

18）とくに断らないかぎり，ハアレツ紙のインタビュー内容はルモンド紙の 2005 年 11 月 24 日付け記事による．

19）ルモンド紙の 11 月 25 日付けオンライン記事による．なお，記事にある「第二・第三世代の移民」は慣習的な表現で，フランスでの「移民」の公的な定義は「外国人として外国で生まれ，フランスに住む人」（国立人口研究所 INED - https://www.ined.fr/fr/lexique/immigre/，国立統計経済研究所 INSEE - https://www.insee.fr/fr/metadonnees/definition/c1328）とされる．したがって，フランスで生まれた「第二，第三世代」はフランス人（フランス国籍保有者）であり，公的には「移民」にならない．

20）大統領時代のサルコジも，2007 年 7 月 26 日にダカールで同じような発言を行ない，強く批判された．全文がルモンド紙に掲載されている（Le Monde, «Le discours de Dakar de Nicolas Sarkozy», *Le Monde*, 2007.11.9）．ここでは，詳細に立ち入らず，次の簡単な説明に留める．すなわちサルコジは，奴隷制を「人道に対する罪」と認め，アフリカから資源を略奪したことも確かで，それは過ちだったと述べたが，誠実な行為でもあったとして，植民者を許した．さらにサルコジは，現代アフリカの諸問題の原因は，植民地支配ではなく，アフリカ人が合理的でも，未来志向でもない点だとした（Philippe Bernard, «Le faux pas africain de Sarkozy», *Le Monde*, 2007.8.23）．なお，

サルコジが「誠実」と述べたのは，植民地には「善意」で「文明化の使命」を果たそうと思っていたフランス人も一部には存在したという文脈だが，こうした見方は，ヨーロッパを進んだ支配者，アフリカを遅れた服従者と捉える植民地主義に違いないし，アフリカ人を非合理的で，過去を向いているとするのは，人々と性格を単純に結び付ける本質主義の悪弊に他ならない．

21）フィンケルクロートの気持ちも推し量っておく．ユダヤ系は，自由や人権の意識が高まった 20 世紀という時代に，ホロコーストという，奴隷制やアメリカ大陸征服と並ぶ人類史上最悪の経験をした．そのため，侮辱を受けると，反射的にホロコーストが蘇り，反発心が高まるのではないか．ナチスが犯した罪はあまりにも大きく，今日でも強い影響を及ぼしていると言える．

22）次のルモンド紙報道による．Le Monde avec AFP, «Pour Jack Lang, Georges Frêche “n'est pas digne d'être aujourd'hui membre du Parti socialiste”», *Le Monde*, 2006.11.16.

23）スポーツに関するステレオタイプな「人種」観については，例えばホバマン（2007）を参照．

24）ルペンを絶対に当選させてはいけないという意味．

25）「サルコ」はサルコジを指し，郊外の若者からとりわけ嫌われる．なお，この記事を書いたブロネの郊外に関する著書（Bronner, 2010）では，10 ある全ての章の冒頭に，サルコジが発したシテや若者や移民系に対する挑発的，高圧的，侮辱的な言葉が並べられている．

26）記事に写真はないが，この場面を撮った写真では 1 人が黒人系，1 人がマグレブ系に見える（滝波, 2014）．

27）3000 団地については，滝波（2014）を参照．

28）当事者である監督の著書（ドメネク, 2014）を読めば，そのような機械的な理解は妥当でないと分かる．

29）2002 年の大統領選挙第 1 回投票日を指す．

30）「ブラン」=「白」で，ロラン・ブランを指す．

31）「シャン」=「畑」で，ディディエ・デシャンを指す．

32）一般に，「白人系選手のタイプ」が変化したとは言わないので，この箇所は人種主義的な見方に近い．

33）サルコジの発言は，「すぐにでも 4000 団地をケルヒャーで掃除する」であり，「ケルヒャー」というドイツ製の業務用掃除機でシテを掃除するという表現が差別的で挑発的とされた．発言に関しては，次を参照．①https://www.ina.fr/ina-eclaire-actu/nicolas-sarkozy-en-2005-le-terme-nettoyer-au-karcher-est-un-terme-qui-s-impose，②https://www.liberation.fr/checknews/2018/03/21/nicolas-sarkozy-a-t-il-vraiment-utilise-le-mot-karcher_1653412/

34）全員ユダヤ教徒というわけではないが，皆ユダヤ系で，ここでは，イスラエル－パレスチナ紛争がフランスでの政治家・評論家とマグレブ系・サブサハラ系の若者の対立に連動する構図が暗示される．一般にマグレブ系・サブサハラ系は，イスラエルの占領と暴力に苦しむ民衆に境遇を重ねられるので，パレスチナへの共感が強い．とくに，マグレブ系は，同じアラブ的な文化を共有する点でパレスチナに親近感を有する．また，サブサハラ系は，旧南アフリカと現在のイスラエルのアパルトヘイトが重なり，かつ旧南アフリカとイスラエルが政治・経済・軍事において協力関係にあったので（Rabie, 1988），パレスチナに同情的になる．

35）https://www.mediapart.fr/journal/france/290411/quotas-dans-le-foot-la-verite-au-mot-pres?page_article=5

36）パリ南西郊のイヴリンヌ県クレールフォンテンヌ=アン=イヴリンヌにある国立のフット選手養成学校．1990 年以降，13～16 歳のエリート教育を行ない，学院に合格した選手はここで共同生活をしながら，学校へ通う．

37）これは当時のことで，今はスペインを含め欧州各国のナショナルチームに黒人系選手がいる．なお，欧州のプロクラブでは，チーム力強化のため，親の出身国の代表にならないように早い段階から黒人系選手を積極的に帰化させ，チーム内の外国人枠の制限数から外しているし，選手も，自身の市場価値を高める場合から，個人のアイデンティティに基づく場合まで，諸々な理由で，欧州の代表チームを選ぶか，アフリカの代表チームを選ぶかを決めており（Poli, 2006），事情は単純でない．

38）新聞記事の見出しは，読者を読ませようとするためのもので，必ずしも内容を要約するものではない．

39）黒人系を，英語の流用で“Black”と言うか，仏語で“Noir”と言うかは，時代の趨勢や個人の嗜好とも関連する．Diao（2014）によれば，“Noir”には過去の歴史を想起させる要素があるので，それを避けるため“Black”が使われることもあれば，英語圏の影響を受け，商業的な理由で“Black”を用いた団体や放送局，イベントやファッションが相次ぐこともあるし，ジャズやブルースは“Noir”，レゲエやヒップホップは“Black”が似合うと思う人もいれば，仏語圏では，“Black”より“Noir”の方が発音しやすく，自然に感じる人もいるなど，多くの意見があるが，それとは別に，フランスでは，共同体主義だと批判されても，黒人系である点にアイデンティティを見出す運動や催し物が 2000 年以降に増えているという．

40）フォレズ地方出身のエメ・ジャケ監督を指す．

41）当該記事によれば，イギリス，ドイツ，イタリア，スペインなどと異なり，フランスでは，1998 年 W 杯で優勝するまで，長くフットが社会・知識人・メディアから軽視されてきたという．その背景としては，イギリスと異なって，クラブのプロ化や経済の工業化が遅れたためフットが労働者階級の嗜好の対象になりにくかった点，中欧諸国や南米諸国と違って，フランスにはフットをナショナリズムや国民アイデンティティの形成に使う必要がなかった点，ドゴール時代に象徴されるように，フランスには，生きる喜び，文明や歴史があるので，フットの位置づけが低かった点，ドイツやイギリスのように選手の私生活を追うタブロイド紙がなく，スポーツ紙は純粋に男性ファンに向けられたもので，そのためメディアも広範な大衆向けの話題としてフットを捉えなかった点，1998 年以前では W 杯での成績が振わず，結果として人気も高まらなかった点，が挙げられている．

42）ベンゼマは 2009～2023 年にレアル・マドリに所属し，2022 年には世界最高選手に与えられるバロンドールを受賞した．ジダンと同じアルジェリアのカビリア系の出身であり，ジダンを引き継ぐ存在だった．

43）2015 年 3 月の県議会選挙と同年 12 月の地域圏議会選挙の第 1 回投票で国民戦線が多くの票を獲得したことを指す．なお，第 2 回投票では，フランス特有の選挙制度の壁を越えられず，国民戦線は大敗した．

44）英語版の記事は https://www.marca.com/en/football/real-madrid/2016/06/01/574e96c146163fdf4f8b460b.html により，スペイン語版の記事は https://www.marca.com/futbol/real-madrid/2016/06/01/574dfc86e2704e5c1d8b463c.html による．

45）1969 年にコンゴ民主共和国とコンゴ共和国の間で結ばれた休戦協定を指す．

46）ルモンド紙のオンライン版では，本文に「実際はより多い」という注が括弧書きで入っている．

47）上院に当たる元老院のこと．

48）第二次大戦中にシャルル・モラスが，ナチス傀儡のヴィシー政権のペタンを称賛するために述べた言葉．

49）スタッキングとは，「人種」によってポジションが決まることを言う．米国のアメリカンフットボールでは，白人系クォーターバックが黒人系ランニングバックやワイドレシーバーにボールを投げて得点するという役割分担が長くあり，今でも相当程度残っている．スタッキングに関しては，エンタイン（2003, pp.348-351）や Bale（2003, p.13）も参照のこと．なお，レ・ブルーにスタッキングはなく，チームのキャプテンも，2000～2011 年までは，ドゥサイイ，パトリク・ヴィエラ，ジダン，再びヴィエラ，テュラム，ティエリ・アンリ，パトリス・エヴラと続き，ジダン以外は全て黒人系だった．

50）https://www.dicocitations.com/citation_auteur_ajout/100436.php#google_vignette

51）例えば 2015 年 12 月の地域圏議会選挙の際，南仏のプロヴァンス=アルプ=コートダジュール地域圏の候補者である国民戦線のマリオン・マレシャル=ルペンは，トゥーロンでの集会で文脈を無視してブロックの言葉を使い，フランス人であるためにはキリスト教の生活様式に従うべきと述べた（https://www.lefigaro.fr/politique/le-scan/citations/2015/12/02/25002-20151202ARTFIG00101-marion-marechal-le-pen-qui-n-a-pas-vibre-au-sacre-de-reims-n-est-pas-vraiment-francais.php）．それに対して，17 名の歴史家が次のような声明を連名で行なった．すなわち，サルコジ，ジャン=マリ・ルペンに次いで，マレシャル=ルペンが，排他的な愛国主義を煽るためにブロックの言葉を流用したが，本来の文脈は，1936 年の民衆の人民戦線には 1790 年 7 月 14 日のシャンド・マルスでの雰囲気が想起されるというものであった以上，ブロックの言葉はどのような反動主義者にも「回収」されないとした（https://crheh.hypotheses.org/939）．

52）列挙された 11 選手をあえて分類すれば，黒人系 6 名，混血系 3 名，白人系 2 名になる．

文　献

エンタイン, J.著, 星野裕一訳 (2003) :『黒人アスリートはなぜ強いのか？－その身体の秘密と苦闘の歴史に迫る』創元社, 455p.

陣野俊史 (2018) : ワールドカップ－フランス代表を通して考える二十年, スポーツ社会学研究, **26**(1), 15-28.

滝波章弘 (2014) :『〈領域化〉する空間－多文化フランスを記述する』九州大学出版会, 317p.

ドメネク, R.著, 松谷明夏訳 (2014) :『独白』G.B. (ジービー), 352p.

バンセル, N., ブランシャール, P., ヴェルジェス, F.著, 平野千果子, 菊池恵介訳 (2011) :『植民地共和国フランス』岩波書店, 264p.

ホバマン, J.著, 川島浩平訳 (2007) :『アメリカのスポーツと人種－黒人身体能力の神話と現実』明石書店, 610p.

Abdallah, M. H. (2000) : “L'effet Zidane”, ou le rêve éveillé de l'intégration par le sport. *Hommes et Migrations*, **1226**, 5-14.

Bale, J. (2003) : *Sports geography*. Routledge, 212p.

Beaud, S. (2015) : Derrière la condamnation des footballeurs de l’équipe de France, un “racisme de classe”?, *Informations Sociales*, **187**, 110-117.

Beyria, F. (2012) : Les relations franco-algériennes dans la presse écrite nationale française: l'exemple du traitement du match de football France-Algérie du 6 octobre 2001. *Modern & Contemporary France*, **20**(1), 87-103.

Blanchard, P. (2009) : Décolonisons nos mentalités! *Revue Internationale et Stratégique*, **73**, 121-126.

Boniface, P. (2018) : *L'empire foot: comment le ballon rond a conquis le monde*. Armand Colin, 192p.

Brohm, J.-M. (2019) : La théorie critique du sport: de *Partisans* à *Quel corps? Staps*, **126**, 129-138.

Bromberger, Ch. (2022) : *Passion football: anthropologie d'une pratique et d'un spectacle*. Créaphis, 170p.

Bronner, L. (2010) : *La loi du ghetto: enquête dans les banlieues françaises*, Calmann-Lévy, 259p.

Diao, Cl. (2014) : Black et Noir: idéologie ou linguistique. *Africultures*, **99/100**, 362-371.

Elbadawi, S. (2006) : Un syndrome nommé Zidane. *Africultures,* **68**, 159-163.

Gasparini, W. (2010) : Les champions des cités: parcours migratoires et effets de quartier. *Hommes et Migrations*, **1285**, 108-123.

Gastaut, Y. (2008) : *Le métissage par le foot: l'intégration, mais jusqu'où?*, Autrement, 181p.

Geisser, V. (2013) : Carton rouge au “Black-Blanc-Beur”: en finir avec les fantasmes intégrationnistes et racialistes des chroniqueurs sportifs et de quelques autres. *Migrations Société*, **150**, 7-11.

Guérin, J.-Y. et Jaoui, L. (2008) : *Noirs en bleu: le football est-il raciste?* Anne Carrière, 270p.

Ndiaye, P. (2009) : *La condition noire: essai sur une minorité française*. Folio, 528p.

Perelman, M. (2016) : Smart stadium. *Raison Présente*, **197**, 27-36.

Poli, R. (2006) : Conflit de couleurs. Enjeux géopolitiques autour de la naturalisation de sportifs africains. *Autrepart*, **37**, 149-161.

Rabie, M. (1988) : *Israel and South Africa: the ties that bind*. First Publishing Corp, 44p.

Simon, P. (2014) : Le foot français, les noirs et les arabes. *Mouvements*, **78**, 81-89.

Sonntag A. et Ranc, D. (2016) : *Couleur? Quelle couleur?: rapport sur la lutte contre la discrimination et le racisme dans le football*. Éditions UNESCO, 89p.

Taïeb, E. (2001) : Les équipes de France de football et l'“intégration”, *Espaces et Sociétés*, **104**, 85-108.